

十字路で立ち話抄二〇〇九年一月～二〇一〇年十二月

# 遺品

吉田惠吉

目次

命溢れる語り	1
眺めの塩梅	3
雪かき仕事	5
四人の女	7
うたた寝	9
お天気まかせ	11
身の移ろい	13
いつも通りに	15
羽一重	16
絡繰り時計	18
壁卵譚	20
生／死の身繕い	22

ゴミ落とし	24
春雷ごつつんこ	26
写真さまざま	28
影絵幻灯	30
それないそらさない	32
岐路に添う春雨	34
梨花を渡つて	36
タンパク摂取	38
呑んで騒いで	40
新緑に枯れ葉	42
川風に	44
山あり谷あり	46

五月の煤払い	48
シヨウブ問答	50
脱ぎ捨て	52
滑り通り良く	54
見えない杖	56
深く浅く	58
変わり身	60
中休み	62
プラスか足すか	64
花数え	66
日々の居心地	68
それぞれのルート	66
	70
どっこい	72

週明けコマ送り	74
梅雨の別れ	76
梅雨明け前に	78
葉裏の手書き	80
日食の遠吠え	82
眩しい影	84
夏へ抜け駆け	86
響け校歌	88
逸らさない夏に	90
消し忘れ	92
夏霧の朝に	94
居座りお盆	96

ひと夏を越す	98
おもしろ半分	100
雲と昆虫	102
見きり分別	104
中間色	106
天下無用の秋	108
風の出入り	110
眺めと音と	112
寄り道	114
連休交歓	116
月とブランコ	118
鳩に水	120
案山子ログ	122

壊しモード……………124

秋夕冠雪……………126

ペア糸紡ぎ……………128

見れども見えず……………130

秋冷浮遊……………132

紅葉散策……………134

捨てる方便……………136

人見知り……………138

亀とゾンビ……………140

手帖スケッチ……………142

喉越しに……………144

野菜便り……………146

普通のフツチャン	148
スーパー・トラ・ブル	150
からだに降る雪	151
今年の一冊	153
新しい雨	155
抜け道	157
筒抜け座興	159
発声練習	161
ゆとりの踊り場	163
匂う言葉	165
梅便り	167
壁と迂回路	169
春へ走る	171



問と答え	173
雲上の珍事	175
名残り雪	177
五分咲き往来	179
急がなくても	181
再会	182
寒暖衣替え	184
春風漫步	186
庭の緑に	188
エピソード	190
猫にペンギン	192
穏便渡し	194

番で綾取り	196
五月のゾンビ	198
身も心も	200
初夏をめぐる	202
見返れば	204
焼け石伝い	206
母性	208
夏の書架	210
風水家電	212
遠くなる夏	214
夏の乗り物	216
雲の額縁	218
真夏の水音	220

村から離れ：：：222

通り雨：：：224

ハイパーな夏に：：：226

〈贈与〉の物語：：：228

空振り：：：230

秋祭りの頃に：：：232

秋の音符：：：234

立ち消え：：：236

思身期：：：238

素通り：：：240

声を雲に：：：242

浮沈こもごも：：：246

水のごとく	246
手指の秋	248
ある節目	250
見えない風向き	252
パスの行方	254
風聞日和	256
落ち葉日和	258
持つてる人	260
誤変換	262
手の助走	264
遺品	266
食の渡し	268

## 命溢れる語り

今年も年明け初滑りとは縁がなく  
相手をするうち正月気分も抜けた  
近所の中学女子バド部活が運動初め。

休憩時もノック用シャツルを並べ  
床に描いた文字を携帯で写したり  
賀状やテレビが部員3人の話題に。

CMや番組を見る限りテレビ業界も  
元気がなくなってきたみたいだが  
NHKで見た立川談志の芸が凄かった。

昨年三月の十時間特番の焼き直し  
おまけに深夜の放送時間だったから  
録画して見たがやはり圧倒された。

じんわり体幹の奥深く響くように  
揺り動かされたのがNHK-ETVの  
吉本隆明語るく沈黙から芸術までく。

分野を異にして一回りほど違う

ご老体からほとぼしる日本語の  
すべてが分かったとはいえないが。  
(90.10.60)

## 眺めの塩梅

わが家に近づく中市（旧登山口）あたりから  
眼前にひとときわせりあがってくる  
冬場の山々の眺めも今日は雲の彼方。

昨夕ヨメと久しぶり待ち合わせた  
近所の寿司屋でもやはり富山に住んでて  
良かったと思わせる立山連峰が話題に。

寿司盤の僅かな勾配に距離感がびつたり  
はまったような塩梅で頂いたイカ刺しに  
ピンクの粉のようなヒマラヤの塩味が。

数億年前の造山運動以前の古地中海が  
岩塩に閉じ込められ舌先に届くまでの  
距離にさまざまな飲食の出会いの物語。

正月特番の収録直後にさんまが無言で  
コップいっぱい飲み干す様に見とれたり  
NHKテレビで女子アナが番組内で味わった  
究極のコンソメスープに言葉なく涙したり。

予想以上のできばえの鍋料理を客に出し  
泣かれて戸惑ったご主人の一期一会話も。  
(09.01.09)  
(60.10.60)



## 雪かき仕事

ようやく平野部にもまとまった雪がいまやなじみが薄くなつた雪かきも融雪装置が肩代わりしているかな。

雪が積もる前に収穫した野菜や米に手紙を添え送つてくれた叔父は高齢になりリフトスキーからノルディックに乗り換え。

小学校の体育館の汚れ具合といい更衣室もない中学校の部活環境など見て見ぬふりで先送りされ続けるか。

効率と成果に追いまくられるような仕事のやり方から刃こぼれしがちで捌ききれない事案が雪だるまのよう。

起きだした大人が登校前の通学路を雪かきした後から子どもが歩いていく光景を偲ぼせる地域や職域の地図は？

稼ぎに追いつく貧乏なしでやってきた

貧困の構図が書き換えられてしまつて  
追い越されてしまつた倫理の彼方から。  
(09.01.13)

## 四人の女

北陸の冬場モードが身体に定着したとはいえ  
寒暖の差が激しいこの頃は運動の際なども  
風邪を引かないよう着衣に気配りしないと。

育ち盛りだと病気がきつかけみたい  
に頑健になつたりするようだが年寄り  
は対照的に弱くなりがちでどうしたものか。

所定の部活時間を見計らって出かけた  
ら進路選別にさしかかった中学生ら  
が集つてカルタ大会で待たされたが  
悪い気はしない。

親戚が訪れた年賀の集いで興じたり  
した百人一首もいつの間にかわが  
家から消え花札などもどこかへ  
しまい忘れたようだ。

ようやくデジタルハイビジョン  
テレビで地球の四季を写した「アース」  
を見たが付加価値を得る以上に  
生きて在る大切さを。

ヨメが揃えた桜餅とお茶のひと  
とときに響く

フリックス時代のニーナ・シモンCDセットが  
ひときわ心や身体に残る凝りをほぐしてくれる。  
(09.01.20)

## うたた寝

数日前の朝にテレビで見聞きしたはずなのに  
オバマ新大統領の就任演説がネットで流れ  
記念コンサートの歌唱をラジオが追いかけ。

身近であり得なかったようなことを見定めたり  
あれこれ考えたりするよすがのひとつとして  
物心がつきだした敗戦後の貧乏暇なし暮らし。

今じゃ貧困層の子が富裕層の子をいじめ返し  
為政者に後期や前期などとくくられがち  
年長者らがぐぐり抜けてきた貧困社会との違い。

コンピュータ処理に業務を移行し始めた頃は  
追いつかないデータ入力などを外注に出したが  
やがては図書館業務そのものを派遣に丸投げ。

そのまま派遣業界そのものが立ち行かなくなり  
そんな職場環境に誰がしたのか問わず語りに  
あちこちでほころびだした不況に揺らぐ暮らし。

何も起こらずに過ごせる一日のありがたさが

どのようなものか味わえる暮らしをめぐって  
いつまで経っても繰り返される半人前の日々。  
(09.01.23)

## お天気まかせ

じつと待っていたみたいに一月も末になって  
ようやく二日続きのスキー日和のひとときを  
楽しんだ翌日はいつもの北陸の冬空に逆戻り。

立山山麓から能登半島の端っこまで見え

一月ならではの眺望に反して三月並みの  
少ない雪がのぞかせるのは不況の地肌か。

なじみの小屋のお気に入りメニューを頼んだら  
今シーズンから困ったことに水が出なくなつて  
もらい水で先週金曜からようやく開店したとか。

いつものビーフカレーやコーヒーが美味しく  
素朴なラーメンに生ビールで喉を潤したりできる  
シーズンを保証するだけの積雪がもたらされるか。

練習をさぼって滑りを楽しむバドミントンの  
大先輩にも出会えたりスキー実習の子どもらを  
避け損なう年季の入ったスキーヤーの転ぶ姿も。

助手席にかみさんが座ったたらがつくりでも

スポーツカーにわくわくするタレントみたい  
電車とバスでスキー場に通う年配者も見かけ。  
(09.01.30)



## 身の移ろい

空模様が周期的に変わるようになって  
公言通り部活への顔出しをサボってでも  
ようやく週一でスキーが楽しめるように。

板を担いでバスと電車でよく行けるね  
とても真似できないよと揶揄されたり  
今じゃ夫婦してリフト券がシルバーに。

とても持て余すような金も暇もないのだが  
変わりゆく同じものみたいな斜面が求める  
立ち位置をそらさない身体捌きの感触が。

板やブーツなど身体にまとわりつかせて  
運べば重くも軽くもない余暇を過ごせる  
人それぞれの姿勢が身についたりしそう。

踏ん張らないで持ちこたえられるよう  
力の抜きどころ収めどころを探りあて  
残りそうな疲れや痛みを消し込む技へ。

さも沈黙を消し込むような呼吸になれば

少しは手の冷えや足の冷たさから免れたり  
痛んだりする肩のこりがうすらぐことも。

(09.02.03)

## いつも通りに

なんとも雪が少ない浮ついたような冬だからあれよあれよと庭木にうぐいすらしき鳥影を見かけたりしているうちに二月も立春が過ぎ。

西のほうでは梅や初鳴きが見聞きされてるがこの年度末を控えた正規・非正規雇用労働者を待ち構えているどうしようもない話題も聞こえ。

企業側の要請に政府の雇用政策を接ぎ木した労働者派遣法が定められ一九八〇年代半ばから派遣労働職種の専門性の箍が外されはじめたが。

戦後早くから製造現場や建設現場への派遣が事実上の雇用不安や中間搾取を先取りしてて一九九〇年代末に派遣職種が公然と自由化され。

低賃金労働力による人件費の削減と労働力の流動化を押し進めいつでも解雇できる労働力に立ち続けた企業経営の破綻のつけを誰が払うか。

(09.02.06)

## 羽一重

先週末から隣の庭の梅がほころびはじめ  
週明けのわが家の庭木に消毒剤が撒かれ  
石灰と硫黄の混じった臭いが艶消しじゃ。

手元作業用に取り替えようとはずした  
メガネのサングラス用レンズをはめる  
リベットが削り落とされたように無い。

数日前にバドミントンをやっていたとき  
右後方からパートナーが打ったシャトルが  
前に出た僕のメガネを擦って相手コートへ。

降雪予報にも裏切られっぱなしのこの頃  
散歩にはちよつと遠すぎる急な用事など  
しまい込んだサイクリング車のお出まし。

持ち込んだ郊外店のスタッフもびっくり  
レンズやツルにひびどころか傷ひとつなく  
東京での修理を済ませ中一日で手元に戻った。

さて無償で素早い対応に喜べるのも今度だけ

とにかくメガネなしでは暮らせないわけだから  
これからは代替品を常備するようにならないとね。  
(09.02.10)

## 絡繰り時計

住み慣れた厳しい寒さを見失ったみたい  
に朝っぱらから春一番に間違えそうな南風が  
家鳴りするくらい吹き荒れる二月半ばに。

久しぶりの新雪に恵まれた滑りが嬉しかった  
昨日のスキー場で話しかけられたスキーヤーは  
還暦の手習いから十五年目のワクワク感が溢れて。

中国で通った小学校の凍ったグラウンドでの  
スケートがやがてスキーへ憧れを育んでか  
定年退職を機会によくやく滑りはじめたとか。

なぜか共に滑る僕ら夫婦が羨ましそうだったが  
タバコを一服しながら降りてくるのを待っていたヨメを  
今じゃ追いかけるまでいろんなシーズンの積み重ねが。

箸休めに美味しい凍らせた甘酢漬け茗荷を  
つまんだりしながら窓の外にふと見かけた  
杖なしで消えていく後姿にスケーターの面影。

中高年になればなるほど我武者らになれず

滑る前に見た『ザ・フォール…落下の王国』に  
身体捌きや技を高める面白さに気づけたか？  
(09.02.13)

## 壁卵譚

あてにならない昨今の天気予報や政治家の

ぶざまな受け答えにうんざりしていたところに

村上春樹氏のエルサレム賞受賞スピーチの一部が。

イスラエル訪問につきまとうさまざまな勘ぐりより

本当のことを書く小説家としての沈黙によりその  
当地で見聞きし触れた感触をたよりに話すことに。

『アンダーグラウンド』をのぞくほとんどの作品に

まるで音楽を奏でるような出来不出来におかまいなく  
コンサート会場でしか味わえない文体のライブ感が。

黙ってたっている樹々それぞれの動きがどうなのか

森の動きで語らせることができれば枝葉のことなど  
幹は与り知らぬばかりか風の囁きに花も咲かせよう。

山のように立ちほだかる幻想の壁にとりかこまれ

システムにぶつかって飛散した割れた卵の殻に  
書き込まれた言葉の裏に黙する失われた命の糸。

行き詰まって強さや正しさも見失いそうになり



脆さと弱さをずる賢さで継ぎ接ぎするしかない  
所在なさを鼓舞する本当のような嘘を聴きたい。  
(09.02.20)

## 生／死の身繕い

納棺師を描いた映画のアカデミー賞受賞がアメリカ初の「黒人」大統領の誕生に続き人種や職種に関わる蔑視をやわらげるかも。

とかく容れ物としての家屋や冠婚葬祭に力こぶが入りがちな生活史を刻みながらもできるだけ死者に関わる生者から遠ざかる。

見たり触ってみたりするなんでもつてのほかたまたま身内の仏様が横たわっている部屋にわが子が入ろうものなら親の血相も変わりそう。

生き延びるためならどんな事でもやりかねず病態の巢に逃げ込むことなど知らぬ存ぜぬでどこまで人や事物から踏み外さないで関われるか。

幼いころ何度か見届けた葬列が行き着いた村はずれのさんまいで焼き裂けた棺桶から炎をかきわけ立ち上がった人肌が焼け崩れ。

DVDが出たばかりの夫婦映画「ぐるりのこと。」で

死体から逃げ出すように生き延びようとする  
ウジ虫の挿話が観覧者の立ち位置を照らし出す。  
(09.02.27)

## ゴミ落とし

生きて死にゆくこと自体が抱え込んでしまう  
起こってしまった不都合や障碍が日常を揺すり  
舞い上がり激むゴミが立ち位置の俯瞰を曇らせ。

買ってすぐのデジカメに写り込んだゴミが  
目玉機能のダストリムーバーでもなかなか落ちず  
ネット通販おすすめグッズでようやくスッキリ。

身体の延長みたいに使う道具の不都合だと  
その気になって手を加えればどうにでもなるが  
心身の関わりが抱え込まざるをえない不如意が。

よそから声がかかるようになってそれぞれ  
拓かれた道を歩む達人の姿から学ぼうにも  
自らの立ち位置を俯瞰できる素人はどこに。

新入団員の子らを前に道具を身体の延長に  
ラケットスポーツを楽しむ手ほどきはじめ  
どう腕を振ってあてて飛ばすかが悩ましい。

腕力のある子は力が邪魔をし非力な子だと

力みがよけいな妨げになつたりするよう  
為にする大人の思い込みが間違ひのはじまり。  
(09.03.10)

## 春雷ごつつんこ

夜が明けないみたいな暗い空が光って  
雷鳴が近づき霰まじりの雨がやんだら  
猫の目のような朝の陽射しが忍び寄り。

あちこちで合格不合格や人事異動など  
さまざまな内示を暗示する春雷もどき  
昨朝は片付け中の雪囲い柱がヨメの頭に。

救急かタクシーかどつちを呼ぼうか  
血が止まって自転車で近所の病院へ  
無帽な準備や後片付けに落とし穴が。

乗り物の乗降口でたむろし他を顧みない  
高校生や短大生の姿を日頃見るにつけても  
あれじゃ面接に行ったら秒察ではじかれそう。

個を際立たせる競争にかまけて己を生かす  
協働の面白みを身につける家庭や学校や地域の  
場を失い続けてカフェ難民相互に貧乏共有は？

異動先で先延ばしにされて溜まった片付け仕事も

臨職や派遣の雪かき仕事の達人の協力があってこそ  
なのにその気にさせる上司は入れ替わる度に痩せ細り。  
(09.03.17)

## 写真やまごま

まだ冷たい風と温かい陽射しがせめぎあう  
晴れ間を選ぶようにMFカメラ館の写真展や  
おふくろの介護認定検診で病院へ付き添ったり。

写真集でみていた以上に石川直樹の作品が  
人間の生涯がたどる行動範囲の地縁の端へ  
連れ出されたみたいなきもちよさが残った。

桜より前にあちこちでるモクレンが咲きそろい  
ここ数年閉じこもったみたいなおふくろだが  
デイ・サービスなどでお花見でもできようか。

一枚の屋久島の樹木写真を指差すヨメに  
写り込んだ光りの輪が何かと聞かれたが  
フレアかゴーストかうまく答えられない。

五角形になっているから写したカメラの  
絞りの前のレンズの枚数が5枚というのが  
いかにもミステリードラマ好きの聞きかじり。

カメラ片手に関西方面へ一人旅に出かけ



撮り貯まったアルバムを取り出してきて  
眺めたりすることも絶えた老母のこの頃。  
(09.03.31)

## 影絵幻灯

朝ごとに東の稜線を北上する陽光が  
二階の窓辺の観葉植物を照らす時節に  
冬の埃を払って部屋の模様替え済ませ。

サイクリング車2台の空気圧を高め  
市内の川沿いの桜並木を北へ走って  
糸電話が運河を跨ぐ環水公園で花見。

穴蔵のような田舎の子供部屋の障子に  
板戸の節穴越しに射し込む光りと影が  
やがて映画へと誘う導きの糸のように。

幼稚園や老人ホームからやってきた  
はしやぎ声と沈黙を縫い合わせて泳ぐ  
水辺にはりめぐらした鯉のぼりの群れ。

埃まみれの録画ビデオの記憶が薄れ  
並べ直すLDとDVDの虹の輝きの向うへ  
ひよっとして母の胎内記憶が甦るか。

ゴミ一つない芝生を駆け回る子どもを

追いかける母の手から飛び去るように  
水面すれすれに滑る水鳥が影と鬼ごっこ。  
(09.04.07)

それないそらさない

柔らかい陽射しと風に揺り動かされ  
もう目立ってきた庭の雑草に混じって  
白や黄や青い花のトリオが春を奏でる。

歩行がおぼつかなくなり四年あまりも  
家に閉じこもりきりだったおふくろも  
どうやらデイサービスに誘い出されて。

新学期が始まってるが来週から担当する  
司書科目の授業曜日が短大行事でつぶれたり  
果たして何回確保できるかが気になる頃に。

今期も四年生学部の科目履修生がいるが  
二年で卒業する学生さんはどこでも何でも  
できるかぎりキャンパスで過ごす時間を！

女が十人いれば三々四人は結婚対象かな  
夏期司書講習大部屋教室の片隅で交わした  
肩身の狭い男子受講生の四十年ほど前の会話。

卒業後の出会いの選球眼を磨く前に

何がストライクゾーンにやってくるか  
キャンパスだけでしか出来ない間合いが。  
(09.04.10)

## 岐路に添う春雨

曇天に鶯の鳴き声がしつとり響き合い  
夏日を挟んだりした二週間ぶりの雨に  
花から新緑へと視線を流されたみたい。

新学期になって何の連絡もなく近所の  
中学の女子バド部活に時間を割かない  
つもりでいたら顧問から急な電話連絡。

リタイアした年金生活者のすべてが  
時間を持て余しているような応対を  
されるのが当たり前に慣れてしまい。

社会的文化的生活基盤を消費と生産に  
どこまでも場面分割され続けた現場を  
離れたからといって現役は終わらない。

生きのいいライブを楽しませてくれた  
ジャズシンガーがツアーから引退して  
老母の介護に勤しむインタビュー記事。

介護や支援サービスになんの不満も

抱かなかったのにそうしなくなって  
できるだけ母の存在に人間的に添う。  
(09.04.14)

## 梨花を渡って

市内バスのお出かけ定期が使える歳に満開の梨畑を見下ろせる高架の往復でふと人生の行き帰りを眺めたかのよう。

リタイアによつていったん切れかかった社会生活に引きずり込まれたのでもなく、よりが戻ったというわけでもないのだが。

週一で授業に出かけるのになじめなかつたかつての感覚が薄らいで新学期が始まれば授業日があつてあたりまえみたいなことに。

街中を二本杖で闊歩する身障者の姿がわが母の老人問題にかぶさつたよう、杖の長さは家族や社会の共同性に届かず。

社会復帰どころか自身への回復の目処もおぼつかない日々の向うから射し込んでまわりつく死を避けるように逃げ隠れ。

初来訪で迷いやすいわが家への道筋でも



ケアマネージャーや市の介護認定職員は  
どんなに迷おうともどうにかたどりつく。  
(09.04.17)

## タンパク摂取

新タマや新ジャガなどのおいしさに  
コシアブラなどの山菜が加わったり  
古びた食卓が生き生きとしなやかに。

白寿で逝ったじいさんとは違うけど  
米寿をクリアしたおふくろの場合も  
軽くなった体重を追い越す食べ盛り。

若かりし頃の好き嫌いなどどこ吹く風  
ヨメともども食べ過ぎにならないよう  
水気不足にならないよう気配りの日々。

何やら足りないものを補い蓄えたり  
力になるエネルギーが湧いて出るなど  
テレビの健康食品CMなどくそくえ。

狭まりゆく一方の身体の行動範囲を  
失いがたい本能の食べることで広げ  
体内の体壁による蠕動運動を繰り返す。

さて片付け食いになったりこぼしたり

入れたら出さなきゃならない食事にも  
体内ルートにおける情報交換の愉しみ。  
(09.04.21)

## 呑んで騒いで

たまたま酔っぱらった人気若者タレントが公園で裸になって騒いだ憂き晴らしぐらいでマスコミが騒いだり警察が家宅捜査するか。

まともな生活者の地域や職域での履歴をちよつとでもひもとけば酒にまつわる武勇伝から破廉恥業まで枚挙できそう。

杓子定規の壁に阻まれた流れのままに澱みで自らの首を絞めるような泳ぎでそのまま家に帰らずガス抜きしてから。

全国区でドサ回りし続ける上司の手癖と配属されるさまざまな部下の足癖の間で事を運べるのが仕事ができるということ。

中学女子の部活に顔を出せば新入りの指導をめぐって課外活動で続ける子らと部外クラブでやっている子らがぎくしゃく。

ちよつと顧問の先生方も居合わせたのに

その場から抜け何をどうするまでもなく  
居残った部員とシャトルを打ち合う響き。  
(09.04.24)

## 新緑に枯れ葉

小屋根を覗き込むように剪定された  
椎木の縮れた若葉と捻れた枯れ葉が  
さわやかな陽射しにさらさらと揺れ。

新学期に入った中学の女子バド部活には  
小学生の頃からクラブに入ってそこそこ  
できて当たり前とそうでない初心者が。

始まったばかりの前期授業の2回目を  
終えたところで質問じゃないと前置き  
どうやって司書になったか尋ねられ。

いまの君らには考えられないだろうけど  
まるで研修出張扱いみたいに職場から  
東京へ大学の夏期司書講習に出された。

六〇年代の暑かった夏の二ヶ月間だが  
そこそこ単位を落とさないよう夜には  
ジャズ喫茶そのほか行き当たりばったり。

もっとしっかりその場で勉強しておけば

なんて野暮なことは今さら芽じゃないが  
多感な一時期の東京暮らしも悪くない。  
(09.04.28)

## 川風に

過日ご無沙汰していた近所のイタ飯屋で  
久しぶりに昼のエネルギー補給してから  
爽やか陽気に誘われ二人でペダルも軽く。

街中や車が行き交う道路はおつかなく  
なんとなく信号がなくて人気の少ない  
川筋の道へといつのまにか出てしまう。

郊外の道路を素っ飛ばせたかつての  
サイクリング気分から追いやられて  
自転車散歩か散策に落ち着いたかな。

水辺の写真を撮って土手をあがったら  
ヨメと談笑していた年季の入った走り手と  
あれこれ自転車談義を交わし川面に浮かべ。

擦り切れたサドルや破けた手袋が語り  
走り終わりの一杯を愉しみに走り出すのを  
見送る二人は走る前に白ワインをあけてきた。

ロンドンや能登半島まで出かけなくても



富山の外へ通じていない川筋の道を選べば  
車にであうことも少なく思いつきり走れる。  
(09.05.01)

## 山あり谷あり

中古DVDで見た映画「ハプニング」の<sup>ミ</sup>緑<sup>ミ</sup>がわが家の狭い庭で風にうねる新緑と遙か彼方で繋がって<sup>ミ</sup>新緑の毒素<sup>ミ</sup>のざわめきが聞こえそう。

連休中の小中学生のスポ少や部活の相手は若い監督・コーチや顧問の先生におまかせで自宅でヨメと世界卓球2009中継にはまってる。

週めぐりでむきあっている若い少女らと家庭を営めなくなった老女らとはどこでどんなふうに円環を描いているのだろう。

待ってたのは老後の悠々自適などじゃなくやんちゃな孫らを風呂に入れたりしてたがこの頃はお袋の入浴介助などもやらないと。

人それぞれの出自に責任はなかるうが母の胎内から産みの苦しみを共有した無意識に向き合わされるのが抛り所か。

定年退職後を生きる身体の近接空間が

性的関わりを失ってどのような軌跡を  
辿ることになるのか皆目見当がつかない。  
(09.05.05)

## 五月の煤払い

バス停向かいの公園の樹木の梢あたり  
空気が暖かいのと冷たいのとせめぎあい  
慌ただしい乗り継ぎを休める座席の眺め。

連休に読み残した本は鞆に入りきらず  
入手したCDは聴き込んだ馴染み具合で  
棚置きか持ち歩きになるかが決まりそう。

小学校1年の担任の先生から本をもらい  
何よりも読むことが好きになってしまった  
よぼよぼを嘆くおふくろにまだ初語りネタ。

半年前に米国のボクサーを8 r T K Oで破り引退を  
決心させたのに続いて英国のボクサーファイターを  
いきなり倒したアジアのボクサーの立ち姿が際立つ。

息子より信用できると頼りにしているヨメに  
小さくなった背丈に合わせて買ってもらった  
杖にすぎるおふくろの危なっかしい歩きぶり。

一つ屋根の下で時には溢れる問わず語り

さて何を食べたか今日はなんの日だか  
わからなくなったようにもふとした折に。  
(09.05.08)

## ショウブ問答

五月晴れにしては暑過ぎ風も生暖かい  
日曜日のBCリーグ野球観戦で焼けた  
両腕のヒリヒリ感がようやく治まった。

球場までの行き帰りの自転車散策で  
花菖蒲のたぐいが目につくようだが  
まるでいずれがアヤメかカキツバタ。

端午の節句に風呂に入れたりする  
蒲の穂みたいな花が咲くのは何か  
幅広歩道を並走しながらの珍問答。

3年目の地元球団の主催ゲームだが  
2千人足らずのスタンドから溢れる  
熱気が街中の野球場界限に届くまで。

三十年近く関わってきたスポ少バドで  
歴代監督やコーチや子ども連なりが  
三代をめぐるようになってきている。

家庭の姿もさまざまに営まれようが

やはり三代からなる家族構成に生誕と  
死を包み込んだほんものの存在感が。  
(09.05.12)

## 脱ぎ捨て

気持ち悪がって庭の草むしりを切り上げた  
ヨメの言葉の先に雉の雌か山鳥かわからない  
抜け羽がツツジの植え込みの間にこんもり。

鳥の亡がらどころか血のあとひとつない  
薄気味悪さが五月の風で飛び散らないよう  
拾い集めても羽ペンにも詰め物にもならない。

猫や蛇などのたぐいと争ったような物音など  
庭に面した部屋で座りっぱなしの母が聞いたか  
それとも庭先で出し抜けに脱毛症になったか。

ふとした入り口からあらぬ出口へさまよう  
男や女の完結できない変身譚の手触りが  
田口ランディ著『蠅男』に読めたよう。

たぶん今日で十年になるWebサイト更新で  
いったいどれだけの誤字脱字をそのままにし  
見直すこともなくほったらかしてきたことか。

とつづく戦後のひもじい暮らしからおさらば



なのに人の細胞は今だ刷り込まれ飢餓モード  
メタボとダイエットの輪から抜けられようか。  
(09.05.15)

## 滑り通り良く

関西地区で新型インフルエンザの感染拡大とその対応措置が急がれているようだが地元の定期健康診断会場では予防案内ビラ一枚無し。

息を吸ってためて吐くだけの肺検診は受けたがバリウムによる胃検診のスルーはもと痔主の故になんとか飲めても出すのが苦痛になつたりしがち。

先だつても老母が夕食を喉に詰めて大ごとにかろうじて救急車の世話にならずにおさまつたが入れることも出すこともどうにもならないつらさ。

老若男女問わず体調が変わりやすい季節なのかトイレのドアを外したり小回り車椅子のレンタルなど日々これ入り口から出口へ事をスムーズに運ばなきや。

いろんな洗剤を試したりなんかした風呂掃除もとにかく使ったらお湯や水で洗って拭いてからあとは風呂場乾燥機まかせでいつもピカピカに。

毎日使うシェイバーの水洗いも面倒くさいし

小型クリーナーで吸い取ってみたり掃除ブラシだと  
静かで悪くないがブロワーで吹き飛ばす手があった。  
(09.05.19)

## 見えない杖

温泉宿のマッサージチェアを試してみたみたいに業者がおふくろ向けにセッティングしてくれた介護用ベッドが腰痛持ちにもなかなか心地よい。

身体に合わせた杖がたよりからあつというまに車いすプラス介助者が杖代わりの様変わりようのでベテランケアマネージャーも飛んできてくれたが。

起きたり掴まったり向きを変えたり座ったり長いことかかって身体の癖になってしまった倒れまいとする体捌きを見極めた介助が肝心。

コンピュータによる目録作成演習にしたって主流じゃなくなったカード目録を学習したのとそうでない学生とでは理解のしかたに違いが。

分かりよさと分からなさのバランスがほどよいそんな教材が場その場でしっかり思いついたり見つかればいいのだがなかなかうまくいかない。

排尿が止まってデイサービス先から病院送りの

電話連絡が授業帰りのバス車内へ届いた時など  
身近な介助ネットワークの網の目に乗つけられ。  
(09.05.22)

## 深く浅く

雉の鳴き声を合図に燕が飛び交う昼下がりに引つ張り出し眺め直したCDやLDや本など聴き直したり読み返す気になりそうもない。

空に緑が爽やかな日和も寝不足気味で眩しく不調で買い替えたプリンタの無線設定などあれこれもたつきメリハリのないこのごろ。

いつも深くなったり浅くなったり繰り返される眠りが分断されてしまう日々が続いたりすると四六時中ががおかしな具合で体調も狂いがち。

いつでも夜のベッドの時間は深く浅くなんて亡くなって間もない忌野清志郎がステージでおかしな人形を抱えた歌いっぷりが偲ばれる。

乳幼児が母の庇護を当たり前にしてきた未来を繰り返して取り戻すように老後の下々の世話を焼けば清志郎はエロティックに「高齢化社会」を歌い上げ。

アントン・フイグが叩くブッカー・T&MG'sを

バックに若く成熟して亡くなったO・レディングと  
山崎まさよしの間あたりの奥にしまっておこうか。  
(09.05.29)

## 変わり身

立ち上がらなくなったデスクトップPCの更新ついでに大画面にしたら作業しやすいが窓際の眺めも初夏の照り返しも遮られて。

好天に恵まれた山王祭りへ足が遠のく一方で夕方の散歩がてらに近所の寿司盤に座つたりおふくろの診察に介護タクシーを呼んだり。

寿司屋で居合わせた元レスラーの解体屋さん元ボクサーの親父さんから鼻が立派過ぎるからボクシングに向いていないと駄目だしされて。

地区大会レベルだと力で勝ち上がったけどそれ以上はセンスがないものには届かない全国レベルで勝ったり負けたりの世界が。

喧嘩や格闘技に身体を張ってきた人に受けと攻めではどっちがより難しいか聞きたかったことをぶつつけるチャンス。

なんといっても攻めそのものが難しく



とりわけ受けから攻めへどう変わるか  
勇気がある練習方法までは聞き逃した。  
(09.06.02)

## 中休み

おととい北陸の梅雨入り宣言が出たばかり  
弁当忘れても傘を忘れるのが反古みたい  
に  
もう中休みかよと言いたくなるような晴れ。

空に向かってさやがつく豆がおいしくなり  
箸ですると皮を剥がせる按配が素晴らしい  
鉢巻き剥きをしたジャガイモを煮つ転がす。

ほとんどやつつけ仕事みたいなヨメの手から  
繰り出される日替わりメニューで食いつなぐ  
食卓に顔を並べるお袋の復帰の日々はまだか。

目覚ましラジオで母と同じ年の森光子が語った  
テレビに出ていた頃に指名され3時間半も  
インタビューした田中角栄は気配りの人よ。

長岡での吉本さんの講演会に三度ばかり  
出かけたおりなど地元出身の田中角栄を  
悪くいう雰囲気など会場では見当たらす。

体育の授業もバドミントンならいいのに

この春から中学の部活で始めて3ヶ月の  
彼女らには先輩の休めの声も届かなそう。  
(09.06.12)

## プラスか、足すか

雨もオタマジャクシも降らない空梅雨に歩きや自転車の散策に携帯する i P o d やデジカメに加えハンディ・ナビが面白い。

往きと帰りで運転手が違っていたり近所の道路事情に詳しくなさそうな介護タクシー同乗時にも役立つたり。

わざとルート表示と違う小路を歩いてルート変更させたりなんかしているとな新築住宅に咲きそろうバラの花壇など。

さすがに画面に出ない隠れ知ったような抜け道で群生するドクダミの花に出会いはるかかなたの田舎暮らしが想い出され。

げんのしょうことならぶ幼少の匂いをデジカメで写すに写せないもどかしさでもバラの花よりデジカメに残したい。

やり残した毒にも薬にもなりそうもない

ガキが生きるやりたい放題を描いた映画  
「ジャーマン+雨」が叫んで唄っている。  
(09.06.16)

## 花数え

二羽の郭公が謀をめぐらしていそうな  
明け方のさえずりが聞こえてきたりする  
安堵を邪魔するような雉の声がうるさい。

物心ついてから年代ごとに心ならずも  
避けられなかった仲違いを繰り返した  
誰彼に再会しても和解できるかどうか。

そんなに熱心なファンではなかったのに  
E・クラブトンとS・ウィンウッドが再会し  
M・S・Gで演奏したライブDVDの聴き心地。

ブルースに目覚めロンドンで出会った  
二人の天才少年を別れさせたのが音楽  
であったとしたら再会させたのも音楽。

還暦を過ぎた同窓会から洩れ聞こえる  
孫か患いかそれでなかったら自慢話の  
類いにわざわざ足を運ぶ暇があったら。

晴れ間にあたりを自転車でぶらぶらし  
フアインダーを覗けば夾竹桃が枝一杯  
狂ったような静けさで花を数えていた。  
(09.06.19)

## 日々の居心地

借家から新築へ使い回した後は一階から二階へ部屋をたらい回しで使い込んだエアコンを取り替えたら梅雨時の書斎の片付けや掃除が快適に。

田舎暮らしから引越してきた白黒テレビに負けず劣らず四十年以上持ちこたえたみたい。サイクリング車も三十年を超えて頑張っていてGPSナビを取付けまだどれくらい走れようか。

家屋やオーディオアンプのように修繕していない古いドイツ製のターンテーブルもしっかり回るしお供のイギリス製アームも滑らかにLPを再生する。

家庭生活用具だけじゃなくそれらを使う家族も手入れとメンテナンスさえしっかりしていれば大崩れすることなくなんとか持ちこたえられそう。

父親による幼児虐待を背負わされた生き難さか「スリラー二十五周年記念アルバム」発売から数ヶ月後を追ったみたい。なマイケル・ジャクソンの急死。



知人からもらった野菜をヨメが料理してくれ  
とりわけ短冊に切ったズッキーニの塩揉みや  
胡麻和えなどに初物をいただくようなおいしさ。  
(09.06.26)

## それぞれのルート66

週末のスポ少で鼻血を流す子らがいたり  
先週までの真夏日続きからいつも通りの  
北陸の梅雨の普段着に着替えた山々の眺め。

夏山の到来を告げるように残雪の少ない  
谷筋が雲間に見え隠れしたかとおもうと  
どんよりした雲間の向うへ遠ざかったり。

娘から贈られたフラワー・アレンジメントの  
色合いがかったの山歩きで眺めた花々を偲ばせ  
雲海の上へ抜けて辿った稜線の眺めへと誘われ。

夏山が青春のルート66だったのはほんの暫く  
下山すれば踏み迷うばかり人生の方向音痴に  
ナット・キング・コールが大人っぽく聴こえ。

仕事を辞めてから聴くボブ・ディラン3枚目の  
新譜を毎日のように流しながら人生の伴侶とは  
ブルースのことなどとあらためて思い知らされ。

スポ少OB&OGあがりのコーチが男女5名も  
先週の土曜の午後の体育館をはやめに後にし  
ヨメと出かけたら樹齢六十年の畑の白ワインが。  
(09.06.30)

どっこい

近所の荒れ庭が整地され無断借地から  
追い立てられたみたいに雉わが家の庭へ  
ご挨拶程度にしておいてほしいものだが。

甲高い鳴き声で何か告げたいことでも  
空き家と見まがう独居老人の敷地内に  
いつからどうやって棲みついていたか。

まあものの考えなどは深まつたりしても  
座としての身体が二進も三進も立ち行けず  
ますますどうやって老いるか仕方がない。

空き地のシーソーの端っこから歩いてきて  
真ん中あたりでふわりと浮いたような半夏生  
季節の片隅の庭の眺めが今年はどうしたことか。

どうにもリタイア後の土俵が見つからない  
当座のデカダンスに伴うものも足りなくなり  
何もかも底をついてからが勝負といえるか。

どっちつかずの空模様を見極めたように  
庭の虫などを啄みにやってくる小鳥らの  
バースアイを確かめようもなくデジカメに。  
(09.07.03)

## 週明けコマ送り

梅雨の雲間からのぞく色濃い夏山の窓が開き  
叔父さんからもらった用具で登りはじめたり  
滑り降りたりしはじめた頃の遠く淡い情景が。

八十歳になって転ばないようノルディックに  
切り替えたなんて叔父さんの電話の語り口が  
隣街へ見舞いに出かける電車で揺られて消えて。

退屈で痩せ細った手足をさすって見せたり  
身体を縛ったチューブやコードが外れたら  
すぐにも畠仕事や野良仕事をやりだしそう。

帰りの電車が来るまでに熱い立ち食いもよし  
バス乗り継ぎ合間に図書館利用カードを作り  
デイサービスからお袋が戻るまでに用を済ませ。

先週末に昨年暮れの吉本さんのインタビューや  
ローリング・ストーンズのライブ映画のDVDで  
力強いひとときを旅したような確かな名残も。

休んでほどなく出かけた週明けの部活から  
3年生が抜けて1年生ばかりの新米練習を  
励ますように豪雨が体育館の屋根を叩いて。  
(09.07.07)

## 梅雨の別れ

久しぶりに梅雨空が晴れ上がって  
雲が切れてきた山のあたりから鷺が  
眩しく羽ばたきながら黙々と飛び去る。

週明けに見舞ったばかりの叔父さんの  
訃報が週末に届いて要介護認定の格上げが  
届いたばかりのお袋はただただ泣くばかり。

敗戦直前に引き揚げてきた母子家庭で育った  
虚弱息子にとつてなにかにつけ叔父さんは  
かけがえのない存在として忘れられない。

通夜や葬儀に出かけようにもデイサービスや  
ショートステイも急には頼めずネット頼りの  
弔電そのほかあれこれ不義理もしようがない。

老けてますますそっくりになったじゃないか  
病床に起きあがって両手をついて支えながら  
語ってくれた親父の記憶が僕にはまったくない。



かけがえない死がさまざまな生を引き寄せ  
梅雨をめぐり株分けした観葉植物の根付きが  
どうなることや葉っぱに触ったりしている。  
(09.07.10)

## 梅雨明け前に

梅雨明けのニュースも聞こえはじめた  
晴れ間に介護タクシーを予約したのに  
帰りが付添い一人用であぶれてしまった。

お袋とヨメが乗った車をサイクリング車で  
追いかけてくればよかったのに歩いて帰る  
徒歩モードのハンディナビの熱さに夏気配。

中学校の放課後にあわせるように出かける  
午後の体育館も日に日に蒸し暑くなるから  
バド部活の女の子らの水分補給が欠かせない。

両下肢のむくみがどうにも治らないので  
利尿剤を増やすことになってしまったが  
お袋が脱水症状にならないような毎日を。

医師が言うカリウム不足にならないよう  
生野菜がバリバリ食べるような歳じゃなし  
毎日の献立はヨメの手腕に任すしかない。

七月の降雨で庭の水やりはほどほどいいが  
高齢化とともに日に日に植物性が表立って  
動けなくなる年寄りの水際立つたたずまい。  
(09.07.14)

## 葉裏の手書き

ここ数日の暑さが嘘みたいな朝の雲行き  
深夜から朝方までつづいた雷鳴に眠りを  
ひっくり返されたような野良猫の鳴き声。

2コマばかり喋ったりした後でバスに  
揺られながら聴くiPodは言葉を遠ざけ  
つかの間切り忘れさせてくれるようだ。

授業のように言葉じゃなくシャトルと  
ラケットと身体捌きで会話を交わせた  
部活の三年生は受験という言葉の世界へ。

挨拶だけで嬉しいのにおまけを手渡され  
彼女らが生きる世界をひっくり返したら  
どのような老女問題が顔をのぞかせるか。

それと見定めがたい季節の受け渡しに  
挟み込まれた葉のような宮城賢の訃報が  
届いたばかりの印刷物の付録からこぼれ。

へ生きるこの価値は平穩無事を希う心の  
持続にあります。〳と「病後の風信」後も  
書くことを続けておられたようだったが。  
(09.07.17)

## 日食の遠吠え

どんよりと澱んだ曇天をひっくり返すように明日の日食が見られるかどうかかわからないが子どもの頃の田舎での日食体験が忘れられない。

田畑をとりまく天地草木のただならぬ気配を嗅ぎ取ったみたいなの近所の飼い犬らの甲高い遠吠えによりいつそう胸騒ぎをかき立てられ。

行動範囲が広がるようになってスキー帰りに雪崩と擦れ違ったり夏山縦走で動きがとれない悪天候に遭遇した怖さは喉元過ぎれば忘れそう。

婆さんの怖い昔語りにも心躍らせたり長じてホラー&ファンタジーものを見たり読んだり異様な空気感を感じさせる作品を好んだり。

ひよつとして物心がつく前にとつくと得体の知れない怖さに出会っているかよくわからないってのが出生の核心に。

上手い下手や唄っている歌詞にかかわりなく  
あるタイプの女性ボーカルを好んで聴くのも  
いつの頃からか訳が分からない不思議さの一つ。  
(09.07.21)

## 眩しい影

路線バスで濁流渦巻く一級河川の橋上や水っぽい緑の丘陵を抜ける市内の往復で前期授業もどうやら一段落というところ。

数年前とは違ってこの頃の学生さんは授業中もそうだけど期末演習や筆記が静か過ぎて教室で間を持って余しそうに。

バス停からの帰り路で二羽のツバメが高く低く厚い雲でできたビブラフォンを打ち追いかけて夕暮れの風がハーモニカで伴奏。

このところ庭に小鳥の影を見かけないが例年のように蜘蛛が網を張ることもなく葉っぱに虫食い痕もほとんどなさそう。

職人が切り詰めすぎた紫陽花は咲かずなぜか半夏生のたたずまいも薄らいでやけに目立ってきた雑草の煩わしさが。



素足にサンダルの虫さされも少なく  
蝶や夏場の昆虫の走りもまだまだで  
狭い庭の生態系もどことなく窮屈そう。  
(09.07.24)

## 夏へ抜け駆け

梅雨が明けないうちに始まった夏休み部活の練習時間は昼をまたいだり朝早くからだだったり午後の暑苦しい時間帯だったり週によって違う。

3名で持ちこたえてきた三年生が引退して中学で初めてシャトルを打つ感触に戸惑う女の子らを引つ張る部活の2年生がない。

そろそろ土からはい出す蝉のように見よう見まねから脱皮するにはまず身にまとった癖みみたいな型を破らねば。

円や曲線が描けない幼児が鉛筆で殴り書きしたみたいな縄文土器の線書き模様が実はその前の編み籠をコピーしたものらしいのだ。

思いつきり真似をしまくったつもりでも身に付くものなんてからつきし残らない。了見の狭い若氣の行ったり来たり頃の頃合い。

さまざまな手かせ足かせがあつてこそその  
自由奔放な醍醐味をどこまで泳ぎきれるか  
籠を編むように夏場の練習を抜け出て秋へ。  
(09.07.28)

## 響け校歌

冷夏と疑いたくなるような七月の終わり  
よくない天気まわりを忘れさせるように  
想い出すこともなかった校歌が流れた。

県予選を接戦で勝ち上がりシード校の  
壁もなんのその尻上がりにゲーム終盤を  
脅威の粘りで甲子園の初切符を手中に。

かつて立教時代の長嶋選手が訪れて  
どんな指導をしたのか知る由もないが  
母校の野球部が凝縮して見せてくれた。

汗と涙の入り交じった逆転だけじゃない  
高校野球漫画をグラウンドで描いたような  
準決勝の戦いぶりでもう十分だった。

ひぐちアサ『おおきく振りかぶって』の  
単行本化を追っかけ読みする先の展開が  
どうなるか比較したくなるような決勝戦。

昨年度の県チャンピオン校といえども  
日替わり全員野球の意気込みと勢いに  
受けにまわったときの脆さがでたのか。  
(09.07.31)

## 逸らさない夏に

夏らしい日和に恵まれないうちにもう八月  
どんよりとして蝉の声も静かで弱々しく響き  
留守電をとればドブ板選挙事務所のだみ声。

ヨメの誕生日もすつかり通り過ぎた七月末  
近所の寿司屋を訪れ二人の胃袋と懐の塩梅を  
逸らさないつもながらのもてなしに舌を巻く。

カウンターや小上がりだけじゃなく二階の  
座敷まで賑わっていてジャーナリズムが煽る  
不況などどこ吹く風というのも居心地の良さ。

百年に一度だろうがなんだろうが戦後の  
貧乏をくぐり抜けて育ったせいかな不況風に  
びくびくするような暮らし向きに縁もなく。

多少なりとも打てるようになった夏休み  
部活の子どもらが身につけ始めた基本わざ  
ひとつひとつを点とし線でつなぐ動きを。

まともなこと正しいことなどの蚊帳の外へ  
追い出されたあげくの虚弱な夏を越すように  
富山空襲の記憶を呼び覚ました朔日の花火。  
(09.08.04)

## 消し忘れ

なんだか今週はじめの北陸の梅雨明け宣言を疑う  
空模様続きもおそらく月末政権交代選挙までだろうが  
だからといって一気に見違える状況も見込めない。

今年はアウトドアで夏を楽しむなんてほど遠く  
除湿の効いた部屋でハイビジョンの紀行番組やら  
あいまにさまざまメディアで音楽や映画など。

ずいぶん使い古した割にS/N比が悪くないのか  
それとも耳が年のせいであつたか衰えたか  
翌日に気づくオーディオ装置の電源切り忘れ。

オン／オフを感じさせない快適除湿も止め忘れ  
待ってた追試課題やレポートの郵便物より先に  
甲子園の夏便りみたいな募金勧誘便が届いたが。

甲子園初出場を決めた母校の対戦相手が決まり  
双方の県予選での勝ち上がりの差が違いすぎてて  
せめて初出場校同士の対戦だったらよかったのに。



マタイ伝の福音書を再現して見せた「奇跡の丘」を  
リマスター版DVDでじっくり見直したばかりだが  
たった一度しかありえない奇跡のあとの復活とは？  
(09.08.07)

## 夏霧の朝に

朝霧のなかから濃い夏が立ち上がり  
畑で齧ったもぎ立てのトマトの味を  
思い出させるような懐かしい霧の朝。

部活の朝練コーチ二日目の道すがら  
いつも見かける蜘蛛の巣やヒマワリや  
垂れはじめた稲穂までが違って見える。

寝覚めの朝ラジオで聞きかじった台風や  
地震のニュースも聞こえていないような  
中学校のテニスコートやグラウンドの喧噪。

体育館を一緒に使うことの多いバスケットや  
バレーボールほかハンドボールなどの女子  
部員らに比べバド部員らはなぜか小さめ。

部活の種目選びに自らの育ち具合に合わせ  
羽根つきが向いているかもしれないなどと  
思ったのかどうか聞いたことはないのだが。

かって暑中稽古や寒稽古に励めた僕は  
中学のクラスで2番目に小さかったから  
背を伸ばしたくて剣道部に入ったのでは。  
(09.08.11)

## 居座りお盆

今週半ばの暑い晴れ間に背戸の草抜き指先に触った茗荷を次々にもぎとって田舎仕込みの夏のかおりにたちかえる。

お袋の物忘れを助長したかもしれないが夏の食材に合わせ生でも煮ても焼いてもうまいが酢漬けにした茗荷寿司もうまい。

デイサービスもお盆休みということで田舎に残してきた墓参りも途切れそう。叔父さんの四十九日も出かけられない。

寝る前に一章だけ本を読むひとときにヨメが読み切るまでお預けにしていたベストセラー小説がびったりじゃないか。

いつのまにやら要介護家族のケアで何をするにも数時間をめどに外出そのほか行動範囲が塗り替えられてきたようだが。

甲子園なんて夢のまた夢だった母校が  
雨天順延された1回戦であっさり負け  
野球部の応援募金も宙ぶらりんのまま。  
(09.08.14)

## ひと夏を越す

お盆過ぎの残暑お見舞いみたいな  
晴れ間にバスと電車で往復約70キロの  
墓参りでようやく夏を越した気分。

引き揚げ住み着いた村の共同墓地の  
てっぺんで落ち葉と倒木に埋もれず  
倒れず昔ながらの墓石も縮んだみたい。

田舎暮らしで飼ってた猫や家禽など  
死んだときの小さなお墓のことなど  
どこにも跡形無く忘れ去られてしまい。

いろんな家畜が言葉を交わしあっても  
飼い主とはまったくチンプンカンプン  
お盆前にDVDで見直した『ベイブ』。

職域や地域がそうであるように家庭も  
年長者の厄介者扱いだけでおさまらず  
生者そのものからも縁遠い暮らしぶり。

風が強くて蝋燭や線香に火がつかず  
ちらほら無縁仏や引越した墓あと  
死者を敬う心の行き場が途絶えそう。  
(09.08.18)

## おもしろ半分

短パンで出歩けば脛に照り返し  
先週の真夏日続きも地べたのみ  
見上げる空の雲はすでに秋模様。

掃除ロボットを試した二階の和室  
涼しい夜の窓を開け放したままに  
床につけば虫の音が眠りのBGM。

山の神からどう見られているか  
掃除の手抜きをしていないはずの  
二間続きの和室からよくもこんなに。

小一時間あまり動き回ったあとの  
掃除ロボットが掻き集めたごみが  
半端じゃなく実用性が過ぎてないか。

夏休みも残り少なくなつて部活に  
顔を出さない子どももちらほら  
少ない人数でも楽しく練習に励む。



あれこれ身体の使い方を工夫して  
掃除をやったりしてきた面白さも  
肩代わりロボットを眺め肩すかし。  
(09.08.25)

## 雲と昆虫

八月も終りの午後の静けさはどこか置き忘れたままの宿題が何だったか夏休みの幕引きの影に隠れ鬼ごっこ。

食べ慣れた素麺が夏の身体に美味しく下手物狂いの爺さんの料理が手招きおじさんの鮎のかおりは何処か遠く。

ジョニ・ミッチェルのライブDVDやジャンゴ・ラインハルトのCDを聴き触れようのない夏の素肌の響きが抜け。

うる覚えの夏休みの味と香りなどレンズを新調したカメラで昔歩いた山間の眺めを写し直したようなもの。

雪溪の端っこで伏流水の音がして目が覚めたら足下に虫が這い回り傾く空高く雲は消え下界は見えない。

どう季節を生きてか生かされてか  
夏の身体の内外へ向かう接点から  
紡ぎだされる感触をたよりに動く。  
(09.08.28)

## 見きり分別

夏場に入ってからお袋のデイサービスを週3回に増やしてみたが様子は相変わらず現状維持どころかむしろQOLは下降気味に。

ゲームが出来ないと階下からヨメに呼ばれデュアルOSノートPCのアップグレードで起動OSの選択設定が変わったのに気づいた。

一昨日の衆院選で政権交代の運びになり勝ったからといってばか騒ぎも似合わずひたむきな姿勢がどのような流れを生むか。

大多数の国民生活が一等多難な情勢で入れ替わった政権政党の前途多難などたかが知れているというべきだろうに。

いかにマイナーチェンジだとしても政治の屋台骨の座の入れ替えを選んだ人々の暮らしがアップデートされなげや。

お袋が戻る前に二人でサイクリングに  
出かける心づもりもお天気しただいが  
野菜や果物も受粉する昆虫の働き知らず。  
(09.09.01)

## 中間色

かんかん照りの夏とはほど遠かったのに  
背戸の日除け風よけみたいな二本の一つが  
枯れかかってきたのは剪定のし過ぎだろうか。

株分けして増えた鉢の観葉植物などを  
そろそろ玄関や部屋に取り込んだみたい  
に  
買い替えた大画面のテレビやパソコンが馴染む。

近所の量販店で高画質録画機器を物色したが  
秋の新製品発売が待っていて目移りしがち  
働き者のお掃除ロボットも更新機種が出そう。

嗜好性と実用性の兼ね備えかたが独特で  
なんとなくはまってしまふ家電製品には  
ありふれた日常の家事がくすぐられそう。

豆腐も油揚げも好きなのだが厚揚げだけは  
どうにもいただけないみたいなのがいても  
ちっともおかしくない味気なさが残りそう。

まだまだ素麺や蕎麦もおいしくいたけるが  
冷酒やビールじゃなく色あいや泡それぞれ  
カジュアルなワインとの相性もよくなつて。  
(09.09.04)

## 天下無用の秋

夏場に走りをおぼれたみたいにおたつた  
タイヤを膨らまそうにも空気入れの  
調子が悪くて走り出す前につまずく。

第4コーナーを回ってゴールが見えだし  
よもやの途中棄権みたいになりタイヤしたが  
当時の体調不良を癒してくれた迎秋気分。

わが人生の眺めが違った寝起きの味わいに  
先を越されたヨメのリタイヤ気分もわかり  
仕事半ばで逝った同僚ともわかちあえたら。

リハビリをかね平日の市街を走り抜け  
9・11直後の川原にサイクリング車を横たえ  
晴れて天下無用の身の置き場を襲う鉄砲水。

身辺を片付けたり部屋の模様替えついでの  
暦代テレビの下敷きになっていたLE8Tだが  
まるでエッジのへたりに感じさせない音色に。



高卒を迎え踏み迷い荒みきっていた頃だった  
ちっぽけな植林の一部を売り払った金をお袋に  
ねだったりして名器を手にした山林の今は？  
(09.09.08)

## 風の出入り

風通しよく二階の窓を開ければ  
爽やかな陽射しの空高く鱗雲が  
ゆったり秋の稜線を跨いでいる。

見れば畳や床置き物を片付けたり  
高いところの掃除も済ませるように  
疲れ知らずの掃除ロボットが後押し。

中3部員が抜けてしまつて1年生だけの  
秋の部活の初日に帰宅前の先輩3年生らが  
中弛み気味の部活に喝を入れにやってきた。

彼女らが2年の中頃からの部活指導で  
怒鳴ることもし(でき)ないコーチの  
駄目さ加減を判ってくれてのことだろう。

あれこれ準備したりしている後期授業でも  
冴えない講師ぶりを教室で晒すしかないが  
そんな駄目さを短大生の心意気が埋め合わせ。

アフリカ勢と奏でるベラ・フレックの新作に  
小躍りしたりテレビで見た餡かけ素麺みたいな  
奇妙な組み合わせがもたらす並外れた風向き。  
(09.09.11)

## 眺めと音と

先週半ばあたりから朝晩めつきり涼しく  
日中はキーボード作業もほっぴり出して  
窓の外へ抜け出したくなるような日和も。

デジカメ散策に持ち出すレンズも遠近広角と  
近眼に老眼が加わったあたりから手元用や  
室内用そのほかメガネ持ちの二の舞みたいに。

歩き慣れ何の変哲もない眺めもレンズ次第か  
日頃聞き慣れた洋楽曲などようやくDVDで見た  
「ウォッチメン」に挿入されたら違って聴こえ。

アルペンスタジアムでイチローが打席で響かせた  
打球音の彼方から跳ね返って来たみたいに聞こえる  
MLB9年連続200本安打達成までのバットスイング。

昨夕は急な下痢で体調がおかしくなり夕飯や  
物音が障るくらい萎えてしばらく寝込んでから  
ようやく食べられたお粥と梅干しのうまいこと。

なんだか小津映画「お茶漬の味」が見たいくらい  
回復してきたようだが小さい頃に田舎の秋の祭礼の  
余興で見たはずの小津映画はちつとも想い出せない。  
(09.09.15)

## 寄り道

秋の午後の日差しが明るい屋内を  
あちこち寝転んで天井を見上げたり  
狭い庭の小さなわが家を見下げたり。

季節の変わり目ごとに身体に  
届けられるシグナルに遅れて  
眼と手をつなぐ体感が揺らぐ。

何やってんのと目ざとく立ち寄る  
小学校帰りの顔見知りの女の子に  
広角カメラを向けたら戯けてみせ。

このレンズだとどんなふう写真に  
節電でいつも薄暗い短大の廊下の壁に  
掲げられた高村光太郎の「秋の祈り」。

まだ見えてこないものをあぶりだす  
漫画家というより彫刻家みたいな  
こだわりが締め切りのバーを超え。

井上雄彦の「バガボンド」を描く  
筆が白い紙を一刀の下に彫りこむ  
圧倒的なテレビ番組に引き込まれ。  
(09.09.18)

## 連休交歓

アウトドア日和が続いた連休前半は  
こうるさい蟬にかわって頼りなげな  
トンボが窓の外にやってくるように。

揺れる光ファイバーの引き込み線に  
ガソリン切れの複葉機がしがみつく  
よれよれの手足が語る秘められた来歴。

敬老の日ぐらいはしゃんとできたら  
大型連休並みの休日デイサービスを  
わが家で肩代わりできない悩ましき。

そんなお袋介護の陣中見舞いみたい  
甥が昨春来の連れ合いと一緒に顔を  
見せてくれるなんて嬉しいじゃない。

相撲中継テレビ画面を横切っては  
曾祖父にどやされたり食事中に頭に  
手をやっっては婆さんに咎められたり。



田舎の実家での忘れられない話など  
聞いた後はリスニングルームに移って  
CDとDVDで「火焰太鼓」の親子競演。  
(09.09.22)

## 月とブランコ

虫の音を聞きながら寝る前に一章ずつページをめくった『IQ84』読了感はNHK特番「桂枝雀の世界」で忘れそう。

村上春樹が1984年に焦点を絞り込み語りはじめた座布団に敷かれたメモに「オウム神仙の会」二月十四日に誕生。

地下鉄サリン事件関連インタビュー

『アンダーグラウンド』では掴めない「オウム」的なるものとは何だろうか？

リビングに取り外し忘れたみたいなの

一九九五年の一枚ものカレンダーだが

1/17と3/20の日付はいつ消せるか。

教団のリーダー像や認知症の父親像に追いつけない肉付きの主人公の男女を繋ぐ赤い糸は解けず結び直せない不毛。

さて1Q84と1984を行ったり来たり  
「リトル・ピープル」が正体不明のまま  
紡ぎだす「空気さなぎ」は二つの月の間。  
(09.09.25)

## 鳩に水

農繁期の作業の一段落を待ってみたい  
昨夜来の久しぶりの雨が止んだ曇天から  
失速したパラグライダーが回り降りる？

窓の外を高くどんな鳥が飛び去ったか  
見上げた空には影も鳴き声ひとつ響かず  
抜け羽一枚ゆるりゆるり着地先を探して。

物心ついた頃に祖父から飲まされた酒は  
俱利伽藍山へ軍を進める木曾義仲を清水へ  
導いた鳩の言伝えを銘柄にした「鳩清水」。

ぬるつとした湯のみ茶碗の口あたり  
酒蔵が健在であれば誕生したばかりの  
新内閣名に便乗して商売できそうだが。

晩酌から日本酒ラベルが無くなり昔を  
飲み直せなくとも呼び名は酒屋の隣で  
神社の名水としていまでも流れていそう。

馴染んだスポーツで汗を流すように  
パンにワインのひとときが流れたり  
切らしたらスコッチかジントニックで。  
(09.09.29)

## 案山子ログ

いつも手元の双眼鏡で飛来を確認して  
いそいでデジカメに持ち替えたとなん  
窓の向かいの電線に白鶴鴿の姿はない。

いったん手を休めたキーボードだが  
ここんとこ妙にミスタッチが多くなり  
機器のへたりかそれとも手が衰えたか。

秋雨前線の上下に従う日替わり空模様  
に連動したみたいに気分が浮き沈みなんて  
いささか老化の秋にさしかかったみたい。

三人四脚で営む老老介護家庭の日々は  
幼児性も成人性も脱ぎすてたみたいに  
主客は入力と出力が間遠になるばかり。

検索サイトの入力窓にキーワードを投げ  
とりあえず飛び去った小鳥をめぐる  
捕獲された画面をスクロールした先は。

飛べなくなった鳥はどう食いつなぐ  
早稲も晩稲も田んぼの案山子の影で  
老いを啄む鳥の若さが飛び去ったり。  
(09.10.02)

## 壊しモード

十月に入ってなんとなく助走モードでいささか狭苦しくなった書斎の片付けついでに白黒テレビの解体にはまった。

四十年ほど前の囲炉裏のある茶の間から持ってきただけに木製キャビネット内は埃の絨毯で内装を施されたみたいな汚れ。

今時のパソコンみたいに特殊な工具など持ち合わせなくともねじ回しとペンチとノコギリでちよつとした木製棚に様変わり。

中年にさしかかった女性のカムバックぶりジャズピアノリストやテニスプレーヤーの姿を映し出していた先週末のテレビ番組で再確認。

ブランク前の自分に何かを足したり引いたり余分なものを付け加えるどころか過不足なく今ある自分のすべてを出した見応え聴き応え。



それにしても楽屋裏でどんな助走を重ね  
自らのよけいなものをそぎ落としながら  
解体トレーニングに励んできたことだろう。  
(09.10.06)

## 秋夕冠雪

庭の日だまりで草抜きなんかすると  
羽音もなくすり寄ってくる蚊のように  
響く還暦過ぎのミュージシャンの自死。

090909日を狙ったみたいに発売された  
ビートルズのリマスターCDを1枚聴き  
愛聴盤LPとの響きの違いに戸惑ったみたい。

今どき見慣れた秋山冠雪風景をデジカメで  
撮り直して眺めたような素晴らしさだが  
暮らしに染み込ませてきた聴き込み感は薄れ。

見つけたばかりの青空文庫のビューワの  
見栄えと使い勝手のよさに嵌ってしまい  
読み忘れた本をディスプレイで読み直し。

山肌を彩る紅葉と積雪のグラデーションを  
滑り降りる夕陽の輝きを追いかけるうちに  
苧田のあぜ道を踏み迷ったようによろけ。

聴き古したCDに読み捨てた本など  
いつの間にか積もった物悲しさを捨て  
去るためにも新しい物を見聞きしなげや。  
(09.10.20)

## ペア糸紡ぎ

剪定作業をやってももらったばかりの庭木にもう蜘蛛の巣がいく張りも秋の陽射しに枯れ葉を干しはじめ。

夏場の餌が足りなかったのか今年のジョロウグモはどうも小ぶりのようですね。なぜか脚の本数が足りないのが目立つ。

六本脚はいいけど八本脚はどうもなんて云う虫ファンもいるようだが蜘蛛の番には相性なんてあるのか。

わが家のあちこちの部屋にそれぞれ新旧散らばって鳴らしたりしているペア・スピーカーをどう離し置くか。

好きな音楽に落語や講演そのほか聴き込むうちに聴き手にとっての距離感が決まるように二人並んで。

たいがいの異性とやっていけそうな  
スタンスからこの人とならではまだ  
どう絆が育まれるかやってみないと。  
(09.10.23)

## 見れども見えず

まだ朝暗い雲間から洩れた陽射しをかき消すように強い雨脚が駆け抜け遙か秋模様を見渡せた窓が閉ざされ。

秋晴れ続きの先週半ばの情報機器の二回目の授業で履修学生が十名近く少なくなった訳がなんとなくわかった。

司書課程の選択科目である授業科目をどう勘違いしたのか課程選択してない女子学生がまとまって履修届に書いた。

目の前にあるお手拭きを手にできず居室とトイレの区別がおかしなこともお袋の認知障害がどうなることやら。

シャワートイレの押しボタンも字が読めているのに今どれを押すべきか決めなきゃならない注意力に途切れ。

ボケも痴呆も何と云おうと見えにくく  
いずれ誰しも介護する者される者へと  
辿る家族の関わりや金銭面の自立から。  
(09.10.27)

## 秋冷浮遊

降ったり照ったり寒暖日替わり模様を窓越しに深呼吸するみたいにデジカメに撮ってスライドで音楽を背景に眺めたら。

B社のSPはどんな音源でもそこそこ鳴らしJ社の二種はJ a z zやR & Bにもってこいだが自然な響きはK氏の紙筒SPやB X社のSPかな。

納戸に眠っていた管球アンプに繋がれたSPスイッチャーをSPセットのセレクターに流用したらときたまの接触不良がもどかしい。

乗り心地のいい自転車で遠出をされていて予期せぬ砂利道に出ってしまったみたいにせつかくの映像&音響散歩も途切れがち。

インドアシーズンを前にリタイアしてから2度目の事務用椅子のバージョンアップで読み書き算盤ならぬキーボード作業向けに。



心身を空中の一点から吊られたみたい  
に座り心地も聴き心地もどこか季節めぐり  
決まったよう定まらぬ解放感に縛られ。  
(09.11.03)

## 紅葉散策

週1回バスで往復する車窓をかすめて  
路線沿いの公園で桜とイチヨウ並木に  
挟まれた路を散策する人が秋色に映え。

今朝は井戸水の温もりで目覚めたように  
聴き慣れたスピーカーがよく響き渡って  
どこまでも抜けてゆくような空の高み。

雪化粧が際立ってきた山並みの谷筋から  
降りる俯瞰視線と生活視線はどのあたり  
交叉点をデジカメに自転車で探せないか。

善くも悪くも絡み合った縄目にかかって  
身動きままならぬ心身を解きほぐすよう  
自問自答する風を聴き分け声のする方へ。

わさび醤油で食べ慣れたヒラメの刺身も  
わさび塩にしたら安物の白ワインまでが  
旨くなってしまうような塩梅のよさまで。

生まれ落ちた血のつながりは泡に薄まり  
手だてを献血しようにも身の置き所まで  
探しあぐねて枯れ葉のように舞い落ちる。  
(09.11.06)

## 捨てる方便

いよいよ薄ら寒く愚図つきがちな北陸の天気をつかの間忘れさせてくれたテレビ映像といえは

「事業仕分け」と「WBOウエルター級タイトルマッチ」。

「国立女性教育会館」をめぐって理事長と国会議員が女性がらみの迫力を前面にいまいちかみ合っていないやりとりのカットが各局のニュース番組で繰り返され。

まるで法廷ドラマまがいの見せ場に仕立てられかつこよかろうがえげつなかろうがいずれにしろ何を捨てるか捨てないか話の本筋から逸れ過ぎる。

コレクションの廃棄でくすぶりがちな図書館では女性職員が多かっただけに時として事が揉めたらあのぎすぎす畳み掛ける切り口上には恐れ入った。

何を外注するか図書館業務のアウトソーシングでも組織的に核となるような卓越性を築けてないようでは自力開発も他力導入も連携も話しの成立ちようがない。

家族三代で暮らしたりすれば老いのかたち比べで  
それまで積み重ねてきた日々の暮らしの軌道から  
要介護者となって人間を超えた人間のありようへ。  
(09.11.17)

## 人見知り

枯れ葉を払い落とした街路樹の幹や枝に  
LED電飾コードを張り巡らす作業車や  
市内電車の軌道増設工事でバスが渋滞。

乗り継ぎ待ち時間につまみ食いした  
本を二冊ばかり買った紙袋を開けたら  
書店員が綴ったような読書感想文が。

新刊そつちのけ車内で隅から隅まで読んだ  
といってもA4裏表にガリ版刷りもどきで  
「新聞」を名のつたミニコミ書評の24号一枚。

本を立ち読みしたり買うのもネットだし  
書評そのほかも画面で斜め読みばかりだが  
時には地べたの本屋ならではの読む感触も。

かつて働いていた大学図書館窓口で司書に  
なりたい相談を持ちかけられた女子学生の  
その後を思わせる御仁がリタイアし同業に？

挨拶がてらに確かめられるかどうか  
時間講師を終えて帰るバスが同じだが  
時を超えた他人のそら似みたいなもの。  
(09.11.20)

## 亀とゾンビ

夕暮れを飾る星と月の眺めを遮るように  
積み木みたいな家が近所に建ち並びはじめ  
ローンに縛られる窮屈な暮らし向きの影が。

元わが家のペットだった二匹の亀がゆつたり  
のんびり生きながらえている姿に見とれた  
おふくろが通院している病院の裏庭の眺め。

サーチエンジンでどれだけインフルエンザが  
調べられているかを指標にした集計データで  
その流行の傾向を視覚化して予測している。

十年も過ぎれば修繕が必要になる建材で  
三十五年返済金利3%で3千万円で建てたら  
1千8百万円を超える利子を払うなんて。

応募していたことも忘れていたBRD映画が  
届いたもんだから音漏れリスニングルームで  
久しぶりの大音量で迫力映像を堪能できた。



グーグル検索窓で「近所」にスペースを入れると  
組み合わせ検索語群の1番目が「トラブル 相談」で  
2番目が「騒音」となって住宅ゾンビはボロ儲け。  
(09.11.27)

## 手帖スケッチ

窓の外は秋晴れそれとも冬晴れ  
外出に何を着るか戸惑いそう  
朝空に薄化粧の雪山がくつきり。

今年も付かず離れず家に寄り添い  
季節を数えたカレンダーみたい  
庭木の紅葉が色鮮やかに落ちはじめ。

暖房室外機の風が微かに揺らす  
植木職人の雪吊りを待つ枝葉に  
遠い雪害の記憶が書き込まれて。

豪雪時の屋根の雪下ろしや除雪作業など  
机の引き出しの奥深くしまい込まれたまま  
読み返されることもない手帖のどこかに。

この夏をかぎり  
に退部した子らの  
中学卒業時に何を贈ろうか迷ったが  
来年四月はじまりの手帖がよさそう。

寝る前に読みさしの本を開いては  
まだ書かれていないことどもを夢に  
どんな朝が迎えられるかくりかえす。  
(09.12.01)

## 喉越しに

寒暖不揃い当たり外れの授業日和だが  
週一回とはいえ短大キャンパス往復は  
ヨメが言うほど当人にとって遠くない。

何事かに縛られがちな日々の切れ切れ  
居場所を移す以外の何ものにも属さない  
やり過ぎしがまたとない息抜きになったり。

壊れそうだった授業用マイクへの対処が  
無視されたようで昨日はとうとう地声で  
2コマ喋ったせいかわいそうが待ち遠しく。

マイクを通した時とそうでないときの  
しゃべる距離感の微妙な違いは肉声を  
増幅する装置に頼る身体の如何にあるか。

物語を紡ぎ出したがる頭や脳みその外へ  
「ウルトラミラクルラブストーリー」は  
はみ出したみたいで台詞が半分も判らない。

直に話すときとそうでないときの間の  
置き方というか沈黙の響き具合が違い  
あらぬ方向へ語り口が脱線しそうに。  
(09.12.04)

## 野菜使い

昨日の庭木の雪吊り作業ついでに背戸で二本残っていた枯れ木が伐り倒されたら狭い空き地に田舎から運んだ木々の想いが。

田舎から引越すついでに運んだ庭木のおまけみたいに柿やイチジクの木など移り住んだ敷地の片隅が野鳥の餌場になったことも。

今さら何か木を植える気にもならないし陽当たりの悪さを口実にしたみたいに畑にしてみようかという意気込みもない。

いつも歳暮れめがけ米や野菜そのほか送り続けてくれた叔父さんが亡くなり途絶えた定期便を引き継いだみたいに、

亡き夫から引き継いだ造園業を営む傍らご夫人が育てた野菜を箱にどっさりと作業にやってきた職人の車で届けられ。

珍しい大根の調理や味付けのメモまで  
添えてあったりして毛筆の手紙に香を  
匂わせた叔父さんの野菜便りの生き写し。  
(09.12.08)

## 普通のフツチャン

昨日も教室の教卓のスタンドマイクは壊れたまま放置されていたが遠い席から聴こえませんかなんて言われなくて済んだ。

いつの間にかマイクを支点のよう喋っていたかもしれない紋切型からすこしでも自在になれたりする話し方に近づけるか。

なんだか幽体離脱してもぬけの殻みたいなお袋を介護ベッドに寝かせてヨメと久しぶり駅前界限に出かければLED電飾が忘年会模様。

違うのはバドミントンの腕前だけの酒席で打ち交わされるさまざま話題に巻き込まれ先日の内藤対亀田戦の高視聴率って何なの!?

タイトルマッチ的な内容としてはおそろしく今年度ナンバー1のベストセラー小説と同じレベルだったといってもよさそうなものだが。



どこにも支点を作らず消し去るのが普通なら  
たかがシャトルロックを打ち返すにしたって  
手首や肘や肩そのほか支点をどこかにしがち。  
(09.12.11)

スーパー・トラ・ブル

藪から棒に虎の下ねたスキヤンダル  
薄日さす雲間からのぞく山裾あたり  
雪に隠れそうな藪を突つきまわして。

思ってもいなかったお宅の息子や娘が  
万引きやフーズクやつてますよなんて  
寝耳に水をぶっかけられた親の気持ち。

まともな生き方がよくわからないから  
虚弱な育ちを引きずった頼りなさ故か  
えてしてスーパースターに弱いのかも。

あたりに石を投げればところかまわず  
ニュースにもならない不倫スキヤンダル  
その手の詮索など見たくも聞きたくもない。

金と人脈からなる場と規模こそ違うが  
一般人だって愛人欠乏症どころか色魔も  
変態もスーパースターに負けず劣らず。

(09.12.15)

## からだに降る雪

眠りを覚ますような、こしこし数発に続いて  
十二月の降り始めにしては半端じゃない雪景色に  
とりあえず前庭に井戸水を融雪散水してみたり。

どうせ暖冬だからと背戸の雪囲いなど  
まだまだとたかをくくっていたりして  
老後の生活設計みたいに先延ばしのまま。

同じ一年でも十歳以前と六十歳以後とでは  
生きてきた年月に占める割合が違い過ぎて  
月日の経過がまるで別物扱いの眺めになる。

若いころはとかく細かくこだわり過ぎたり  
歳を食うほどに何でも大雑把に済ませたり  
ほんとうは心身の曲線は逆じゃないのか？

日々のあちこち跳ね返ってくるボールを  
受けとめ打ち返すスペースを見つけたし  
しなやかな身体捌きで深く送り込めるか。

空きを作って受けたパスを蹴り込むには  
牡丹雪が粉雪に変わるように老体時計の  
文字盤を細かく分割し続けるようにして。  
(09.12.18)

## 今年の一冊

ことしの日めくりが一桁になった晴れ間に  
初滑りならぬ街中散歩がてらに年中無休だった  
CD&LPショップを訪ねたら定休日でがっかり。

市内に引越してきた一九七二年頃に廃線に  
なつたはずの路面電車の環状線が装いも新たに  
復活しピカピカの新車両が中心街を走りはじめ。

往年の賑わいを仕舞い忘れてしまったような  
再開路線沿いの商店のなかには開通に合わせ  
リニューアルしたお店も見かけられたみたい。

試験運転で何度か見かけた黒い車両はどこ  
灰色と白い満員の車両が交互に通る過ぎる  
街筋で正月休みを楽しむ酒肴や漫画本など。

白・灰・黒グラデーシヨンの三車両をデジカメで  
写せなかったが帰って読み終えた『ヘヴン』には  
「いじめ」を汲み上げた生死のグラデーシヨンが。

田舎に引揚げてきて小・中と絶え間なく  
続いていた辛さを誰にも打ち明けられないで  
持ちこたえてきた受け皿に出会えようとは！  
(09.12.25)

## 新しい雨

夜回り当番で真新しい拍子木を打ったら  
大晦日に降り積もった雪に吸い取られて  
手に刺さった古い拍子木の棘が抜けたか。

新年に備えた酒肴やおせち料理を平らげ  
引越してきて以来続いた年賀の集いも  
散開になってひっそり静かな正月三ヶ日。

子をもうけたばかりの働き盛りに羨ましい  
なんて言われたりする年金生活者は表向き  
いつの間にか老々介護家庭の余力のなさが。

お正月のもてなしからヨメは解放されたが  
届いた年賀状に返信賀状を準備しようにも  
なぜかハガキ印刷だけが紙送り不良になる。

とりわけ冬は雪だけじゃなく空気中には  
様々なリズムやコトバが漂い出すようで  
お正月特番のテレビから音楽番組を選ぶ。

冬ごもりを溶かすようなコトバの雨みたい  
水滴で曇った窓を拭う度に違って見えるぞ  
北川朱実『電話ボックスに降る雨』の景色。  
(10.01.05)



## 抜け道

松の内に授業が始まったキャンパスの  
運休バス停にうっかり立ってしまつて  
もの言いたげな目配せに導かれるまま。

路地を左右に折れ駐車場を抜けたら  
路線バス停がすぐそこだったなんて  
学生の後を歩いてはじめてわかった。

外れつばなし降雪予報に備えた完全武装が  
邪魔になったみたいにマイクは声を通さず  
教材表示用のビデオ切り替え装置も駄目で。

メインのケーブルをノートPCに繋いで  
なんとか切り抜けられたが集中と分散を  
繰り返すコンピュータの歴史話をし忘れ。

みんなと一緒に雪かき仕事を始めたのに  
判を押したみたいに独り取り残されて  
雪道の夢と現実をめぐって踏み迷う。

鞆を後ろ手に斜に構えて利き手を前に  
降雪渋滞の着膨れバス車内を後から前へ  
開いて閉じた抜け道を泳ぎ抜けてきた。  
(10.01.08)

## 筒抜け座興

平成も二〇年を越えるあたりから  
昭和暮らしの欠片みたいにひとつ  
またひとつと家電が壊れはじめて。

部屋の片隅や机の上に捨て忘れた  
みたいに放置されたパソコンでは  
パソコン通信からブログあたりまで。

流行のツイッターはどうしようか  
なんて思ったこともないくらいに  
解らないから手も足も出そうにない。

ネットのコミュニケーションツールは  
手足を延長した家電技術とは違うようで  
身体性を隔離する技術のための技術みたい。

人と人の関わりを媒介する道具なのに  
家庭や社会生活を営むうえでどうしても  
抱えこまざる得ない自分が見えにくい。

井戸の外と繋がっているようでその実  
水面に映し出されたおのれの面影に似せ  
あらかじめ見ようとした情報を着込んで  
(10.01.12)

## 発声練習

この冬三度目の寒波で終日氷点下の昨日は  
懐炉のように iPod の響きをひっそり着込み  
渋滞のエアポケットみたいなバス車内に。

オンライン雑誌の一記事を読むように  
アルバム作品としての LP や CD をバラし  
収録曲の一部だけを買ったり聴いたり。

白身魚の刺身をワサビ醤油ではなく  
小皿に散らした塩でひと撫ですると  
ジグソーパズルのようにはまりそう。

見覚え聞き覚えのある映画や音楽の  
忘れていたシーンやフレーズがまるで  
はじめてのようによみがえる心地よさ。

夜明けを知らせる鳥のいない冬場の朝は  
目覚めの床をぬるくしたりゆるくしたり  
ラジオ体操のような FM 放送がもごもご。

グラスワインの温もりが抜けないうち  
滑り落ちた屋根雪が囲いを這い上がり  
庇に届く前に崩しはじめる雪の止み間。  
(10.01.15)

## ゆとりの踊り場

もの言えば唇も寒い晴れ間の繰り言か  
テレビCMで「続きはウェブで」なんて  
視聴者のネット接続環境への丸投げ広告。

開設間もない地元スポ少バドHPが日頃の  
活動報告や連絡や相談などに役立つほどに  
まだまだ届かない当地域ネット利用状況。

予定される体育館建てかえで今後の練習場所を  
どうするかスポ少バドの父母らの臨時総会で  
ジプシー練習体制維持の連絡網が取沙汰され。

集中とリラックスを同時に維持できる幅が  
それぞれの内部に広げられるようになれば  
人も組織ももつと余裕がもてそうなのだ。

携帯もネットも普及していないアフリカ大陸で  
バンジョー片手にいろんな地元ミュージシャンと  
コミュニケーションしまくったCDにぞっこん。

録音現場の様様をドキュメンタリーに仕上げた  
DVDを見たらまたCDが聴きたくなりCDを聴けば  
またDVDが見たくなるという仕掛けに踊らされ。  
(10.01.19)



## 匂う言葉

郵便受けで凍えたメール便を取りだし  
暖かい部屋で封を開いたら微かに泳ぐ  
冬の匂いの頁をめくったような手触り。

雨の中を出かけ帰る頃は曇まじりで  
後期最後の授業を終えて帰宅し寒い  
玄関で靴を開けたら教室のぬくもり。

司書として就職のあてがなさそうだが  
図書館事にびつたりみたい在学生の  
匂いが隠されていそうなこともあって。

とてもそんな人物写真は写せないが  
せめて四季折々の景物が匂いあふれる  
そんな写し方ができないものだろうか。

身過ぎ世過ぎの片隅でひよつとしたら  
居ても立ってもいられないほどなのに  
ちつとも動きがない動画を眺めながら。

ぴったり響くアフレコの言葉をさがす  
鼻腔に太古の魚を泳がせ遠い記憶から  
呼び覚まされた匂いの形を聴き寄せて。  
(10.01.22)

## 梅便り

居間のテーブルのコップに梅枝があつて  
通販で買った梅干しに添えてあつたらしく  
これでよりいっそうおいしくいただけそう。

車椅子からの移乗もおぼつかなくなつた  
おふくろの目にもとまつたようだがかつて  
自家製の梅干しを漬けたことなど忘れたか。

スポ少バドの子どもらの大会の付添いで  
寒い体育館へ持参した弁当を食べて何だか  
物足りなかつたのは梅干し切れだつたから。

コート内に梅の小枝のつぼみがふくらみ  
まさに花開きはじめて動きでシャトルを  
打ち返す小学生もいたりして見とれたが。

上手いとか強いということだけじゃなく  
身体の使い方やラケット捌きの柔らかさ  
滑らかさにまだまだ上達の華が開きそう。

勝ち負けにこだわるあまり試合そのものに  
集中できず競り合いに弱い子どもには

目の前にたたれてどんな花言葉を贈れば？  
(10.01.26)

## 壁と迂回路

お袋が介護サービスに出向いた間に滑り納めしたい気分で窓の外を見れば三月の雪が融けた屋根に黄砂の汚れ。

今の時間帯じゃ北向きの壁もまだ日陰だが迂回路もバリバリに凍っていてさぞ足裏がくすぐつたくなる滑り心地を楽しめるはず。

夫婦ともども急斜面やコブを避けるよう迂回するだけのシーズンを過ごす回数が少なくとも足腰立つうちは滑り続けたい。

日々を繋ぐ山あり谷ありいやおうなく差しかかった岐路で迷いに迷ううちになぜか急斜面やコブしか見えなくなつて。

三世代で住む家を新築した二十代後半に何枚か図面を書き直したりしながら介護を考慮した内装にはまったく思ひいたらず。

若い頃は遠くが見えず目先ばかりに囚われ  
老いを生きるほどにますます愉しむ範囲が  
狭まってしまふ斜面を滑る視界を広くして。  
(10.03.12)

## 春へ走る

一日ともたない三月の晴れ間を読んで  
世話になつてゐる庭木職人がやってきて  
雪吊りが外された庭を吹き抜け家鳴り風。

吹き千切られそうに揺れる梅輪が眩く  
慣れない下の世話の一コマの吹き出し  
感情に走るから実の娘の世話にならぬ。

甲斐性が無くできないと嘆くお袋の  
どうにもならない老いのダイヤ改正で  
日々どこに居着いてゐるのかも不案内。

部屋を出るとき切り忘れた室内暖房で  
夜間の気温低下でしょんぼりしていた  
サイネリアが生き生きと花開きはじめ。

ヨメが用意した食事やおやつを目前にし  
ようやく姿勢を保ち直そうとしはじめる  
お袋の部屋だと常温暖房の花置き場だが。

食以外に関心が向かなくなってしまうって  
部屋において眺めた花の名前の響きが  
シネラリアと聞こえることもなさそう。  
(10.03.16)



## 問と答え

恨めしい気分ですキー板を片づけたりしながらやり過ごした変わりやすい三月の天気を凝縮した三連休のお楽しみの目玉はBSの「志の輔らくご」。

スキーやバドミントンは中年からはまったがこと落語やジャズとなると十代の曲がり角で出会ってなんとなく耳から離れないお楽しみ。

TVで第八十二回選抜高校野球の球音が聞こえはじめ五年目になるという「志の輔らくご in PARCO」に甲子園球場の張り替えられた芝のような眩しさが。

まさかの初戦敗退した高校野球部監督が応えず仏頂面が試合直後のインタビュー画面で流されその後にとんでもない発言をして謝罪したとか。

「なぜ別れなきやならないのか判らない」から答えられないように「なぜ負けてしまったのか」答えられない問いかけに出会ったらどうするか。

まだ答えが見つからない問いを切り分け  
じやあどうしたらいいかを自問自答するしか  
ない面白さが落語を聴くことや運動することに。  
(10.03.23)

## 雲上の珍事

春休み中の近所の中学の女子バド部活の朝練の出ばなをくじくような雪模様にもめげない風邪気味の子どもを早退させた。

あり得ないとタカをくくっていたのに  
グーグルが中国からの撤退のニュースは  
四月バカの前倒しということではなさそう。

当方には両者の先行きなんて関係ないけど  
一企業にとって中国市場は無視できないが  
グーグルのない消費市場ってのもうそ寒い。

teI net 版からWeb版に移行して足踏みする  
OPACの賞味期限切れにつけ込んだみたい  
に  
公共図書館の本を調べる「カーリル」が現れ。

中国や東欧からの留学生の図書館だけでなく  
館内でのネット利用のマナーに手を焼いたが  
注意すると片言の日本語で必死に訴えてきた。

グーグルと中国の諍いで改めてネット社会で  
デファクトスタンダードみたいになっていて  
グーグルがない世界が浮き彫りにされたみたい。  
(10.03.26)

## 名残り雪

ぶり返した寒さにまだまだ鍋物も

いけそうだがいまおすすめとなると

新<sup>ニ</sup>のつく野菜類を生かした旬の味わい。

食べ慣れているはずなのにキャベツや

菜の花や新タマネギや新じゃがなどで

古びた食器や食卓にも新しい季節感が。

おはようございますとおやすみなさいを

いつものいただきますとごちそうさまで

受け渡し続けられる家族の階段を上り下り。

賽の目食からミキサー食へと食材の形が

崩れ去るように人は人によって生かされる

いまここを見失ったみたいにあやふやに。

この冬にまとめ読みしたマンガのひとつ

安倍夜郎『深夜食堂』を囓めば囓むほど

さまざまな味わいのページがめくられる。

家庭内の日常食みたいなメニューの味が  
しょっぱくなったりどのようにもなる  
人と食材とを繋ぎ止める食欲模様の裏表。  
(10.03.30)

## 五分咲き往来

残雪が霞んで見える山並みを背景に  
スキーからサイクリング車に乗り換え  
曇り空の川縁を花見の人出に混じって。

介護タクシーで付き添う通院緩和を  
ケアマネに勧められるままに四月から  
往診してくれる街医者がお袋の部屋へ。

日頃元気だった人が衰えゆく様を  
日々目の当りにするストレスなど  
家族に対する配慮などもさりげなく。

遠い田舎暮らしの頃だと町医者が  
黒いカバンを自転車にくくりつけ  
ことあるごと三代の家族を往診に。

川面に映る桜並木を揺らし遊覧船が  
通り過ぎる背後から声があったようで  
振り返れば定休日の美容師が母を連れ。

小学校の入学式を済ませた親子連れ  
お花見弁当のサラリーマンにまぎれ  
デイサービスで訪れた介護老人らも。  
(10.04.06)



急がなくても

ねがはくは花のしたにて春死なん  
そのきさらぎの望月の頃（西行）

春に生まれて春に逝つた人に乗せたら  
広い道を選ぶように走る霊柩車の急ぎ  
自転車で走り慣れた眺めが歪んで流れ

山麓に近い斎場を出たらまばらな雨滴  
今春も来れないはずだった城西用水の  
桜をこんなかたちで見ること：：：

おはようにおやすみなさい  
いただきますにありがとう  
さいごまで家であいさつをかわし

昨夏に高齢の叔父を見舞ってみおくれず  
望んでいた家族葬儀で母をみおくれた翌日  
授業に出かける街の眺めも違ってしまい

リタイア後の体調も回復してきた7年前  
頼まれ仕事に出かける朝に再就職だねと  
祝金をくれたあの手で背を押されながら（10.04.16）

## 再会

夕飯姿を確かめヨメの声に風呂場から出たあと救急の手を尽くしてもらったお袋の初七日が赤飯を食べたがっていた満九十歳の誕生日に。

毎朝介護ベッドから車椅子でドアをはずしたトイレへ運び下をきれいにして朝飯だったのに床の間のお骨に灯明や線香で掌を合わせるだけ。

数時間ごとにトイレ往復の日々になってからうまくいったりいかなかったりあんなにっぽいお袋と言葉を交えるようになった時間が消え。

「紙パンツで頑張られたんですね」と耳元で救急処置室へ案内する看護師にささやかれおもいあふれへたり込んでしまいたい。

毎日の献立から一人前が減ったみたいにお袋の手からも洗濯物や汚物のゴミ出しのほか諸々の手間ひまが取りあげられ。

見るからに外科医らしい救急担当医から  
「救命／延命措置」の判断を促されるまま  
穏やかな「看取り／看取られる」出会いへ。  
(10.04.20)

## 寒暖衣替え

四月も末だというのに、寒<sup>さむ</sup>の戻りか  
2コマ続きの授業の教室で女子学生が  
体調不良になり保健室で休んでもらい。

肌寒い中学の体育館で部活なかばに  
体調が良くないという女子中学生の  
大事をとって帰らせたりしたことも。

風邪ひとつひかないでこの冬を越えた  
お袋の在宅介護暮らしの生活臭まで  
線香の匂いで消されるこのごろだが。

いつ訪れるかどんな形でやってくるか  
まったくわからない死とは特定の瞬間  
などではなくてそこに至る迄の過程に。

なんにもできなくなってしまうって  
九十歳を迎えるなんて目出たくない  
なんとか保たれた正気の言葉だった。

お金も使えなくなったら要らんもの  
とにかく寝たきりにならず車椅子で  
トイレ介助時に甲斐性なしを嘆いて。  
(10.04.23)

## 春風漫歩

朝の陽射しが逃げないうちに春風を入れ  
レンタルしていた介護用品をすべて解約し  
もぬけの殻になった四畳半の仏間の広さ。

こんなからだで行ったら店の迷惑だから  
行くのを憚った馴染みの寿司屋のカレンダーに  
眺めていた仏像写真と車椅子の傍にあった本だけ。

朝の目覚めが気になった日々が途切れても  
閉め切ってしまうとまだそこに居るようで  
あれから庭に面した部屋の戸は開けたまま。

そのほか済まさない手続きなど  
出かけついでにヨメが買ってきてくれた続刊も  
録画したホラー映画などもどこか擦り抜け気味。

昨秋に婆ちゃん子だった甥夫婦が訪ねてきて  
置いていつてくれたCDのなかになぜかあった  
「グレゴリオ聖歌」がしっくり聴けたりして。

三歳で死に別れた父親のことはともかく  
よろよろぼっくり母親に死なれてみると  
家のどこにいても母屋を無くしたみたい。  
(10.04.27)

## 庭の縁に

永眠することになったその日も庭で  
咲き揃っていた古木の八重桜が今朝は  
逝った母を追いかけるように散り落ち。

四十年ほど前引越しに同意してくれた  
祖父に連れ添うように移植した庭木らが  
芽吹いて住人が二人になったことを告げ。

百歳間近まで疾病もなく誤嚥で咽せたり  
苦しまないでわが家の居室で看取ることが  
できた祖父は打ち水をした夏の庭が見納め。

庭の手入れどころか家事もままならず  
食べる楽しみだけになってしまった母は  
喉に詰まっても大丈夫だったのに三度目は。

三人四脚の介護暮らしの日々のやりとりの  
積み重ねで祖父をお手本みたいに母の死を  
わが家で迎えられたらというのが願い事に。



救急車を呼んだのはいたしかたないとして  
なぜ真っ先に往診医に連絡しなかったのか  
救急死による警察連絡もなく看取れたのか  
(10.04.30)

## エピソード

連休中はデイサービスは休みだし頼みのショートステイも予約できず入浴そのほか母の介護疲れで音をあげたはずだったのに。

遠路弔問してくれた甥夫婦とあれこれ  
思い出話をかわしたりしたからだろう  
穴の空いたような揺らぎで乱れそうに。

三年目の吉本さんの雑誌連載エッセイが  
今月も休載で三ヶ月続けて読めなくなると  
高齢の身体が大丈夫なのか気になったり。

人それぞれたどる老いの現れの渦中でもがき  
遠い近いにかかわらず年寄りがそれなりに  
元気でいてくれるだけで日々を生きる糧に。

直近記憶が覚束ない母の検査などを勧めた  
介護担当市役所員は中井先生が書いていた  
「エピソード記憶」溢れた日々を知るまい。

テレビは要らないからラジオと新聞だけに  
どのくらい聴いてどれくらい読んでいたか  
「虐待されても家に居りたい」だなんて。  
(10.05.04)

## 猫にペンギン

連休明けの目に青葉を際立たせるような風雨が昨日の残暑を拭い去るようように激しく窓にあたりガラスの汚れを消すか。

縁側に陽が射さないと床の間に拵えた祭壇に眠るお袋に明かりが足りないか気になったりして障子を開けてみたり。

いつ聞いても歳勘定が八十歳を過ぎたあたりで止まったままになったのは数日間突発したせん妄が治まってから。

老いた身体を構成する三つの側面がぶつかり合ったみたいな阿鼻叫喚でなす術もなくおろおろ抜け出た先へ。

長老猫のような安らぎを呼吸したり子育てに埋没するペンギンのような覚束ない足取りで食べ物漁ったり。

自らの生涯に固有の幕を引くように  
生き通してきた姿が植物的になったり  
動物的になったり人間的に裏付けされ。  
(10.05.07)

## 穩便渡し

朝晩暖房が恋しくなる戻り寒波に  
厚着をして外出したらバス暖房が  
余計なお世話みたいな効き具合で。

なんとか図書館で働きたいんだけど  
どうしようもなくコネでもなんでも  
就職口を紹介してもらえないですか。

昨年の男子学生に続いて今年も女子が  
就活中の言葉を授業の終わりをめがけ  
投げかけてきたりする時期がめぐって。

現役だった頃の人脈で数名ばかり橋渡しし  
したようなこともあったけど昨今では  
介護がらみでお袋に引き合わせられた人が。

ケアマネや介護士や通院老人内科医から  
介護訪問医までとても良くしていただき  
とても文句など言えないのだけれども。

被介護者が望んでいたであろうような  
介護の日々から看取りの時まで在宅から  
医療および介護施設との関わりが難しく。  
(10.05.14)

## 番で綾取り

気づけば朝の第一声がキジからカッコウへ  
一足先に初夏の響きがやってきたようだが  
二階の窓から望遠レンズを向けた先に姿は？

ハイビジョンで見直したヒッチコック映画の

「鳥」は並のホラー映画じゃとても味わえない  
居心地悪さに鳥肌が立つてくるような逸品だ。

北大植物園でカラスに襲われた怖さとは無縁の  
とりのなん子著『とりぼん』を読みはじめたら  
なにやら庭続きの「里山」に入り込んだみたい。

庭先にやってくる小鳥らがめつきり減ってきて  
餌場か巣箱でもなんて思いめぐらしもしたけど  
ヨメが気に入らないだろうから鳥マンガで補充。

相手を思いやったり添い遂げるそぶりもない  
番の野鳥など空き地や川縁で見かけたりして  
ずいぶんいい加減なように見るからにお似合い。



とても家族を営む夫婦のお手本ならずとも  
雀の巣作りも受け付けない細かな住宅が建ち並び  
空き地の雑草とともに野鳥の巣も追ひ払われ。  
(10.05.21)

## 五月のゾンビ

どの辺りからやってくる寒気なのだろう  
時節外れの重ね着心地がしつくりしない  
おかしげな今週の空模様には戸惑うばかり。

岡崎中央図書館のHPアクセス事件報道じゃ  
容疑者逮捕が一人歩きするだけで担当館員や  
システムベンダーの姿がちつとも見えてこない。

使えば使うほどバカになるとアメリカ大統領に  
指摘されたばかりのiPadを求め日本にやってきた  
韓国人のお膝元では米軍基地は縮小されているとか。

沖縄での駐留米兵による日本人少女暴行事件  
あるとき地域住民から沖縄県民へと広がった  
米軍と犠牲を強いる日本政府への二重の抗議。

「普天間基地」を廃止して基地兵員や施設を  
本土に移すという日米首脳会談で成った合議は  
日米防衛協力指針の「有事」の拡大解釈で反古に。

かの村山首相が言明した自衛隊合憲の道筋が  
橋本首相によって「集団自衛権」で舗装され  
憲法第九条が無効化された道をたどるゾンビ。  
(10.05.28)

## 身も心も

ようやく五月末の不順な天候から抜けたか先週末に母の満中陰法要をこじんまりと行い無事お墓に収まった安堵の思いで六月を迎え。

かつて村のわが家から通った中学校に近い街中の料亭で法事一式やら納骨の送迎バスも手配できたし配膳混合料理も美味しく頂けて。

お盆の墓参りのたびに見上げたりしていた稲葉山牧場のブランド牛ステーキが初物で死者をみおкуった悲しみをやわらげる旨さ。

敗戦直前の外地で夫を失い二人の子どもと命からがら引き揚げてきたお袋が生き抜いた生涯でどれくらいやけ食いやけ買いできたか。

言う事が効かなくなるばかりで身体と心が引き裂かれるままにいま・ここを受けとめ不平不満や愚痴ひとつこぼさずヨメに感謝。

なんとか食べても寝たきり状態の車椅子で  
好きだった本のページをめくるのもやっと  
いじりはじめたiPadの向うにお袋の指触り。  
(10.06.01)

## 初夏をめくる

梅雨への扉を忘れさせるような散歩日和に  
開店以来夫婦で味わってきた近所のイタ飯店が  
日曜だというのに臨時休業で先行きが気になる。

昨年通りすがりに眺めさせてもらったり  
デジカメで撮ったりしていたF宅前のバラが  
すっかり様変わりして咲き誇ってびつくり。

医者を辞めたご主人の老後の道楽というより  
バラが好きな奥さんが二人の住まいを飾って  
散歩ついでの僕らも見ごろになると楽しみで。

田舎に居たときわが家の裏にあつて人の目に  
とまることもなく祖父が世話していた庭木の  
主なものは今も引越したわが家の前を飾る。

九十歳半ばを過ぎて越してきた祖父は衰えて  
植木の世話などとてもだったが仏壇の前で  
朝晩のお勤めだけは欠かすことがなかった。

不自由な手で照る日曇る日めぐりにめぐった  
小さな和綴じの仏典に残された指跡をたどる  
そんな時が何時かはやってくるかと分ってても。  
(10.06.08)

## 見返れば

先週末から今週にかけて心躍った快挙  
梅雨入りの鬱陶しさもしばし忘れさせた  
「はやぶさ」の帰還とW杯緒戦で初勝利。

寝不足の窓際の朝陽よりも輝いて見えた  
航行トラブルを拾い読んできたPC画面で  
オーストラリアの夜空の大气圏突入中継。

帰り際のミッションにはなかった計らいで  
燃え尽きる直前の「はやぶさ」が見納めた  
地球は飛び去った頃とはどう違っていたか。

この7年の間に地べたのわが家では母が  
老いて介護の途上で死へ帰還してしまい  
嫁ぎ先で娘は心身を病んだ末に家族崩壊。

営んできた家やかつての職場だけじゃなく  
今も小学校や中学校の体育館や短大の教室で  
日々接している子どもから大人への女たち。



母をなくして気づかされた男の無意識の  
寝床には女の狂気がやどっているように  
出かけた男の帰還先はどこも女の射程内。  
(10.06.15)

## 焼け石伝い

梅雨の晴れ間の真夏日も昨日限り曇り空から字幕のような雨が降り近づく雨音が遠くの風景をぼかす。

この頃は木曜日毎に会社説明会や入社試験などがあつたりして休む学生の授業漏れをどうしたものか。

中学の部活でも新生が入来たり来なかつたりでシャトルを打つ基本的な技の習得が不揃いだが。

ものごとを習得するにはそれぞれ基本的な型を見よう見まねで試し自分なりの型を身につけなければ。

そんなあたりをじっくりやらねば型破りも生まれてこないし何にも身に覚えのない型無しがはびこる。

挨拶を交わしたり日々の仕事や  
家事をこなすように学習したり  
練習したりする時間はどこかに。  
(10.06.18)

## 母性

どうやら梅雨空に行き場を探しあぐね濡れそぼった1羽の鳩が電線にとまり両手を合わせた黒いシルエツトのよう。

母の納骨を済ませてからは日に一度は老境にさしかかった頃の祖父みたいに仏壇に向かうようになってしまったが。

3歳で父を亡くして父性体験が無いが長男にとって母に死なれるというのみずからの無意識の由来を無くすこと。

長女の場合は無意識の由来が父にあり母は無意識の座にとどまりつづけるからその死に際して無意識の揺らぎ少なく。

敗戦時に一人息子を殉職で失ったうえ二人目の妻にも先立たれたりしていた祖父が朝晩のお勤めを始めたのはいつ。

小学生の五、六年の頃だったかそんな  
祖父の姿が奇異に思えたりしたのだが  
無意識の抛り所を失った父性はどこへ。  
(10.06.29)

## 夏の書架

上り道かそれとも下り道の分かれ目か  
梅雨の中休みの名残を惜しむみたい  
窓際のソーラーサイクルがゆつくりと。

ナビのバッテリーも干上がりタイヤの  
空気も抜けてきたみたいな絶え絶えの  
漕ぎっぷりがまるで綱渡りのようにも。

WTCビル間を綱渡りした男の映画から  
イチローのMLB十年連続十度目になる  
球宴選出まで目を見張る渡りっぷりだが。

個人文庫や著作目録そのほか大学図書館に  
働いたものにもまでことばを届けてくれた  
梅棹忠夫氏の訃報をネットで知ったばかり。

かってラジオで訃報を知った柳田国男の  
全集も図書館勤めの頃はいつでも読める  
なんて思ってただけで手元には数冊のみ。

文庫本で出たのを買いそろえたりしたけど

書庫作業の折など書架にどっしりと並んで  
通りすがりに目にした眺めに到底及ばない。  
(10.07.09)

## 風水家電

西や表日本の集中豪雨が隣県に近づき重たい雨雲の向こうに姿を隠しながら立山連峰がそのの接近をくい止めるか。

梅雨時に除湿や空調など最新の家電の使い心地がいいと信じてもいないのに家の風水がよくなつたみたいに眠れる。

使用後のカーペットの足触りが良くて掃除ロボットを使い続けて1年近くで掃除を中途半端で投げ出されるように。

リセットしたりして動くようになったが外資系の製品なので修理を案じていたら無料メンテナンス案内が届いてびっくり。

介護作業に明け暮れた頃の手抜き用に面白半分買った自動掃除用具だけど自分らがへたってきた時まで使えるか。

参院選挙の開票速報の合間にヨメと見た



「愛を読む人」の原作本の行方を問われ  
十年前の本の埃を携帯掃除機できれいに。  
(10.07.13)

## 遠くなる夏

歳とともに暑い季節限定の行動範囲が狭まってくるにつれ過ぎし夏の記憶を避暑地みたいに訪ね歩いたりしがちに。

亡き祖父さんもお袋も繁茂していた畑や庭の雑草に負けたりしない夏を過ごしていたのにとてまかなわれない。

田舎に放棄してきた山林の下草刈り売り払ってきた田や畑での手伝いも炎天下でのアルバイトも未成年まで。

十数年続いた夏山歩きもどうやら散逸したアルバムみたいに遠のき冬場の山麓スキーを今に持ち越す。

過ぎ越し夏にむしった草を積んだ堆肥の小山に火照る手を突っ込み川釣り餌のイトミミズを探したが。

溜まるだけで読み直していない

立ち上がりの遅いPCの肥やし  
書類がすぐ起動するiPadで甦る。  
(10.07.20)

## 夏の乗り物

二階の窓から立ち木越しが癩だが  
西方の神通川の花火を眺めるたびに  
東の夜空を焦がした富山空襲の記憶。

まだ歩けない三歳児の両脇に手を  
差し入れ夏の縁側のガラス戸越しに  
見せてくれたお袋は引き揚げ2ヶ月。

そんな手触りが懐かしいお袋を  
自転車の荷台に載せて町まで走り  
映画を観たりした高校生の夏の夜。

ことの運びも作品の内容もまったく  
思い出せないのに真っ暗な帰り道で  
雷鳴に自転車が転けた記憶が残って。

ハイボールを知ったのも映画でだが  
お袋がよく買ってくれた角瓶の夏を  
一本箸のマドラーでかき混ぜていた。

車椅子を押しつづけた日々が終わった

ロスタイムのようにあちこち出かけず  
胎内みたいに部屋を暗くして映画三昧。  
(10.08.03)

## 雲の額縁

晴れた空がより高くなったようで  
目に見えて色濃くなっているのに  
涼しくなりそうな気配がしない。

今年は炎天下の庭の草むしりを  
やらなくてもいいめぐり合わせ  
なのに腕や脚の日焼けが目立つ。

片道十分足らずの毎日の往復で  
サングラス越しに見上げる空が  
マグリットの雲の展覧会のよう。

そのうち暑さにめげて減るだろう  
などとタカをくくっていたのだが  
近所の中学へ夏休みバド部活通い。

これまでの休暇中の部活とは違い  
バドミントンができる顧問先生と  
十三歳まつ盛りの子らに向き合う。

先生にあわせミスったら腹筋ほか

負けた点差の数だけダッシュする  
なんてこともやりはじめたりして。  
(10.08.06)

## 真夏の水音

冷蔵庫で冷たくしたバナナを食べると  
古い井戸水で冷やしたスイカや甘瓜や  
トマトや青リンゴなどを齧った涼しさ？

陽が陰つてもちつとも涼しくないけど  
井戸水をたっぷり庭木に撒いたあとの  
蛇口をひねって顔を洗う気持ちよさが。

なぜだか家の隣にあつた防火用水から  
バケツ半分ずつ水を汲んでは家の前の  
砂利道に朝夕撒いた小学生の頃の日課。

家の後ろを流れる小川から柄杓で  
水を汲んで背戸の庭木に水をやる  
なんてのもそんな夏の日課の一つ。

かつて夏の水やりや水撒きを躰けた  
家族と移り住んでからひとりそとして  
ひとりいなくなったが庭木がそばに。

お袋を最後に大正世代が町内から消え



引っ越して以来のあたりの静けさが  
なんだか滅びゆくひびきのようにも。  
(10.08.10)

## 村から離れ

お盆の天気予報がはずれたおかげで田舎においてきた墓参りができたがあまりの暑さに散策する気にならず。

昆虫少年だった頃の茶白山あたりもすっかり様変わりしてカブトムシやクワガタやカミキリを採る影もない。

あの頃までは村の物事を仕切ったり相談事を取りまとめたりした老人を何処かの家で当たり前のよう見かけ。

そんな人がいてくれるだけで仕事が滞りなくうまく捗ったような事など当たり前だった職場も遠のいた面影。

親戚つきあいも薄まる四十年あまり夫婦二人になって初めてのお参りに墓掃除がされ蝋燭が灯り花も線香も。

お墓近くに住む誰かの心遣いから

逃げ出すみたいにそのうちお墓の  
引越などと思いつめぐらしたりして。  
(10.08.17)

## 通り雨

いまだに盛り上がらない蝉の鳴き声に  
合わせたみたいで庭に出没する昆虫も  
見かけないのに水撒き時の藪蚊が凄い。

狭い庭のどこにも水たまりなどなく  
雨乞いしたいくらい乾いているのに  
どこからボウフラが湧いて出るのか。

田舎の夏をふんどし一本で過ごした  
明治生まれの祖父はなぜ蚊に刺され  
愚痴の一つもこぼさなかったのか？

小学生になった孫に茶碗酒を飲ませ  
おそらく飲む打つ買うはお手のもの  
尋常小学校出の山師人生を歩んだか。

なんだか事あるごとに繰り返された  
いつも鼻柱に陽が当たると思うな<sup>な</sup>も  
今となつては裸一貫の人生訓めいて。

本など読むな物事にはこだわるな

蒸し暑い午後の遠雷が公界を告げ  
暗くなった空から雨など降るのか。  
(10.08.24)

## ハイパーな夏に

西側の窓辺で干した布団はまだ熱いがこの夏二階の窓際で猛暑を走り抜けたソーラーサイクルに朝陽が陰りはじめ。

背戸で風雨を遮った常緑樹が二本とも切り株だけになってしまつてまともに西陽に晒される午後の残暑がきびしい。

亜熱帯みたいになつた夏を過ごすには  
快食・快眠・快便だけじゃなく樹木とも  
仲良くしたいがさてどうしたものだろう。

暑さしのぎに文献コピーをオンラインで  
頼もうとしたら利用者IDの期限が切れたか  
前回の謝絶から丸二年も間が空いたなんて。

図書館勤めの頃だと身近に参照できた  
常備本の類を今になって思い出しては  
ぼちぼちネットで買いあさってみたり。

参照するだけの2次、3次文献あたりは

閲覧端末から電子書籍的にアクセスしても  
1 次文献の本文は身体的に読みたいもの。  
(10.08.31)

## 〈贈与〉の物語

積もり積もって亜熱帯並の暑さも雨台風で洗い流されたみたいに朝晩が涼しくなつて虫の音もひとときわ高く響きだしたようだが。

熱投していた先発が立ち上がりに予期せぬ危険球退場でいきなりマウンドにひきずり出された新人投手みたいに秋がやってきた。

久しぶりの高橋源一郎の新作のページが手にとまらないくらい面白いもんだから先延ばされた季節の変わり目も眩みそう。

幼い次男と長男の言葉をめぐるやりとり『『悪』と戦う』がこの夏に負けない〈文学〉の熱さをもたらししてくれたみたい。

ひとつの「世界」が他の「世界」によりお互いに支え合うような成り立ち行きを邪魔したり妨げたりする「悪」が蔓延る。

さまざまな「世界」が互いを保つには



疲れたお母さんの眠りを覚まさないような  
〈贈与〉の糸が編み込まれた関わりから。

(10.09.10)

## 空振り

いつの間にか夏から秋のモードに切り替わったというより暑さからワープしたみたいな今朝の肌触り。

夜空に溶けかけた半熟卵みたいな月を見かけデジカメ片手に開けたあたりへ出向いてみれば雲に隠れ。

稲が刈り取られほの暗い畦道で静止画と動画を切り替えて写し立ち位置がすっかり定まらない。

小沢前幹事長が民主党代表選に負け地盤と看板を背負って選挙を戦った政治家の最後の一人の動画が止まる。

とつくに都市と農村の対立は無効だが田舎者はフライングダーに蝶が入り込む瞬間を半押しシャッターで待受けたり。

いつどこに落ちるかわからない稲妻を

雷鳴轟く二階の窓からデジカメ動画に  
写し取れたとしても瞬間の輝きは無い。  
(10.09.17)

## 秋祭りの頃に

村に住んでいた頃の秋祭りの余興といえはなんといつてもチャンバラ映画だったのになぜか併映された作品の役者の顔と名前が。

タイトルもストーリーも定かじゃないのに小津映画作品の配役などが映画の記憶のはじまりに刷り込まれてしまったみたい。

おそらく小6の理科室で初カラーみたいナトコ映画の「オズの魔法使い」以前に「東京暮色」などチンプンカンプンだが。

半世紀以上過ぎた敬老の日あたりでヨメとリマスター版DVDで見直したりしてるとまるで田舎暮らし時間が立ち戻ったみたい。

あの頃どう書いていいかわからないまま出しそびれた自分宛の諸問題の何かだがいまになって忘れていた宿題のようにも。

食べ急いだ祭御膳の写真などが残されて

あつたらPDFファイル化してiPadに入れ  
老眼には見づらい細部を指先で押し広げ。  
(10.09.21)

## 秋の音符

涼しくなつてようやく庭の草むしりなど膨らんだゴミ袋を運んだ町内の収集場所はまるで申し合わせたみたいに草袋が山積み。

崩れかかった空模様の電線に鳥がいつぱい止まった向きが同じでも雀は五線紙に似合いムクドリは不揃いでカラスは音符にならない。

字が汚く答辞などお袋に清書してもらえたが何枚書いたかわからない図書館の目録カードはすべてデジタルデータ化で処分されただろうか。

電池の消耗が激しいデジカメでの長回しは完全な勃起で描かれた性行為のように響く秋の虫の音が途絶えてしまわないうちに。

立ち枯れそうな意識の行方を尋ねながらどこか群れからはぐれたカラスの鳴き声をかき消すようにヘリコプターが飛び去る。

留守と間違えられて立ち去ってしまった

宅配物品を追いかけて電話をしたように  
てきぱきと包装箱が開けられた中に何が。  
(10.09.28)

## 立ち消え

朝の陽射しが立ち上がった窓を開けば  
掃除ロボットが静かになった部屋まで  
庭から虫の音とともに秋が匂ってくる。

松茸と浅蜷のスープスパゲティや  
一足先にいただけたりした蟹など  
秋の味覚が愉しい散歩を数日前に。

食後に味わったウイスキーの見事な  
バランスの良さをWTCビルの綱渡り  
みたいに素晴らしいなんてすべらせ。

いつだって抜かりのない料理でもてなす  
若旦那によれば散歩の折に見かけてきた  
近所の物静かな佇まいに設計者の縁者が。

誰の設計か知ってか知らずかツインタワー  
建設計画を知った大道芸人だけじゃなく  
テロリストの標的にもされてしまつて。

体調を崩し仕事を辞めた後の息抜きや



ヨメの家事からのしばし手抜きなどを  
目論んだ船旅は「9・11」で立ち消えに。  
(10.10.01)

## 思身期

日毎に秋めいてくると夏に外向していた身体が内向するようになってしまうからいつもの食べ物までが味濃くなるのかな。

例年になく花付きが濃くなったような金木犀をデジカメで捉えにくいように身体の内側の細かな動きが見えにくい。

腰痛のリハビリからはじめた骨盤体操や相撲の四股を踏むみたいな股関節などをめぐるゆったりした下半身の運動などを。

たいした動きじゃないのにやった後からなんとなく身体そのものが弛んだように歩いたりすることまで愉しくなることも。

ペダルに足を乗せただけで進む自転車じゃないけど身体を一寸前に傾けたらどこまでも歩けそうな気分になったり。

衰えゆくいっぽうの力まかせ運動じゃ

ない技が体得できるようにならないと  
とても生涯スポーツなど維持できまい。  
(10.10.05)

## 素通り

うつそうとした茂みがうずくまり  
秋の装いが透けて見える木立から  
風もないのに葉が散りはじめたか。

母を看取つてからの半年が過ぎ  
まだ暖かいのかも肌寒いのか  
介護の時間から解き放たれたが。

筆跡の途切れたメモ用紙が残り  
生まれてから死ぬまでの沈黙が  
表裏で深く綴じ合わされたまま。

学生の名前と顔が一致しなくとも  
名前を書き忘れた演習課題を前に  
戸惑いながらも過去の筆跡を探す。

やっと恵まれた子宝と妻に先立たれ  
定年間近の空港清掃員アブ・ラードは  
決死の覚悟で隣家の不和家族に向き合う。

誰かを諭したり救ったりしようにも

受身のお節介を焼くようにしてしか  
歩けない原っぱを夢見て風が吹き抜け。  
(10.10.12)

## 声を雲に

肌寒そうな網戸の陰からガラス窓へ  
寝ても起きても重ね着の温もりを  
着込んだゴミみたいに蓑虫が動く。

テレビで見てさほどじゃなかった  
スイスアルプスを貫通した掘削機も  
ネット写真で見ると轟音が響きそう。

電子雲から飛び出してきた巨大な  
モグラのモニターパニック映画が  
手当り次第にめくった写真の1枚に。

子どもから老人まで日頃見かけている  
顔付きから遠く離れた表情の人たちを  
映していた中東やアジアの近作映画が。

人さまざまな生き方を秘めた昨日の  
表情をどのようにも明日へと紡ぐ  
今日の身体のあるようが声の響きに。

ボクサーほど見かけとかけ離れた

話し声はほかでは聞けそうにない  
日本語に吹き替えた映画の喋り口。  
(10.10.19)

## 浮沈こもこも

準備してきたことの半分ぐらいが  
出せるかどうか関の山だるうに  
練習のすべてをやり遂げたリング。

WBCバンタム級タイトル戦で西岡と  
ムンローが見せた12ラウンド中継に  
二日続きの自転車疲れも吹き飛んだ。

秋めいた郊外を東へ西へ走り遊ぶ  
穏やかな日和に恵まれた先週末の  
ペダルに甦る行き帰りの上り下り。

どんなに軽く走れる自転車も常に  
乗り馴れていないとシーズン初の  
スキー靴のように尻が馴染まない。

日頃持ち歩いたりするノートPCに  
デジカメそのほかとにかく軽くて  
身体にしっくり使い心地よければ。

リタイアしたあとも山あり谷あり



何が起こるかよもやの日々もあれば  
さてどんなトレーニングや練習を。  
(10.10.26)

## 水のぶとく

山雪は平年並みなのに寒気が訪れ秋がジェットコースターみたいに駆け抜けて身体がついていかない。

シューズや体服やラケットなしで体育館にやってきたりPCや教科書を家に置いたまま教室にやってきたり。

いつ役立つかわからないながらにとりあえず暮らしのガラクタ箱に無造作に放り込む心遣いはどこへ。

田舎住まいの頃の納屋に入ったらいつ使うか見当もつかない様々な大物小物で足の踏み場もなかった。

当面役立ちそうにないものまで必要になる頃合いを見越したように取り置いた明治生まれの祖父だが。

虚弱な孫にゲテモノでもなんでも

食わせながらとにかく生きのびさせ  
当の本人も医者要らずで百歳まで。  
(10.10.29)

## 手指の秋

ひんやり指に冷たくなったiPadだと床に入って眠気を催すまでの読書が灯りなくとも読みさし頁がすぐ開き。

そんな立ち上がりの良さと手軽さを兼ね備えたようなノートPCのドアが薄く静かに開かれたような使い心地。

住み慣れたわが家もくたびれてきて玄関の1ドア2ロックシンダー錠が外れないとヨメが電話で内から開けて。

解体して組み立て直す前にモノは試し溝に油を浮かべたキーを穴に差し込み二つとも何度もぐりぐり回せば元通り。

いくら年を重ねたって人としての成長はやってこない未知の領域に入り込まざるを得ない老いの手先。

その人なりに思春期に出会いがちな

わからないことはわからないままに  
持ちこたえる力が若さじゃないのか。  
(10.11.02)

## ある節目

バス乗り継ぎ時間に日だまりをうろうろ  
昨日みたいな外出日和は二日とつづかず  
家で「吉本著作リスト」のアップデート。

「吉本資料集」第1集の書誌データを  
アップロードした十年前に使っていた  
パソコンがなんだったかもうわからない。

届いたばかりの「第100集」をしめくくる  
松岡編集者宛の吉本氏の「書簡」の言葉が  
読者と編者を結ぶ節目のように身体に響く。

様々な書き手や編集者がいて読者が生涯に  
出会う著作なんて限られているからこそ  
何をどう読むか生きること左右したり。

より良く生きられる呼吸ができるように  
言葉を身体の奥深くどこまでも届かせる  
吉本著作や講演のリスト作成をやったり。

まっすぐ臍の下あたりまですんなりと

呼吸が降りてくるようになれば自在に  
動きを保つ余裕なんていつのことやら。  
(10.11.05)

## 見えない風向き

ざわつく雲行きの間隙から時おり射し込む朝陽に主がいなくなつた蜘蛛の巣がピカピカ光つて揺れて。

子どもがいない家庭から聞こえる地元小学校の老朽化した体育館の建替え寄付金応募など無駄なこと。

ようやく電気ボート「もみじ」にヨメと乗り込んだら貸切り状態で富岸水上ラインの眺めを二人じめ。

風を入れましょうと総舵手が窓を開け放った舳先から吹き込む音と眺めをデジカメ動画に収めながら。

かつての富岸運河の埋め立てそのほかやって道路などにしてしまっていたら衆目のなかで水明が愉しい公園はどこ？

実生活で沈黙の言葉に耳を傾ける



なんてことが薄らいで行くままに  
映画「霧の中の風景」に耳を傾け。  
(10.11.09)

## パスの行方

やっつけ料理が手腕のヨメなのに鍋物の具そのほか時節の料理など二人きりの分量合わせに戸惑いが。

日々繰り返す数時間置きの介護がなくなつてキーボード作業などでのつい食事時に遅れたりすることも。

自営の個人文庫サイトに久しぶりやってきた修正依頼がきっかけで見直し作業終了案内を返すことに。

アップデートが少ない吉本著作のWeb公開リストもページを覗いた方々からの情報が送り込まれつつ。

小・中学生相手のバドミントンや短大での司書課程の時間講師などその道で受けたパスの中継作業か。

介護の毎日で受けた元気のパスを

日々の食卓を囲んだお袋が逝った  
このごろになってようやく気づく。  
(10.11.16)

## 風聞日和

先週末は三日続きの好天に二人で子どもらのバド大会に付き添ったり久しぶりに市内をめぐる自転車散策。

熊が出そうな河川敷は危ないから神社の黄葉を写そうとお目当ての境内に入りそうになって喪中に気づく。

本やCDそのほかネット買いのこの頃ずいぶん間があいた馴染み店を訪れ代わり映えしない品揃えが懐かしい。

女手一つでレコードショップを引き継ぎ庭に畑もある中古住宅に移り住んだら畑仕事が愉しそうな店主の笑顔がいい。

リタイア後の手遊びに農作業なんてとてもやりきれないなんて思うのは三反百姓の小倅だった成れの果てか。

二年ぶりのそば屋のお昼は相変わらず

繁盛していて美味かったがこれまでは  
当たり前だったサービスも無くなって。  
(10.11.23)

## 落ち葉日和

予報外れの小春日和に戸惑ったみたい  
路線バスが遅れた乗り継ぎ時間潰しの  
公園の陽射しに舞う落ち葉と鳩の群れ。

枯葉舞う地べたを見下ろすように  
蜘蛛の巣に絡めとられた落ち葉が  
行き先を見失ったまま風に揺られ。

三限と四限との隙間に張り渡され  
窓の向うでたるむ送電線の中程に  
張り付いたように作業する黒い影。

教材サイトのアクセス設定を見直し  
授業に臨んだらネット障害で使えず  
照る日曇る日北陸の空模様のように。

どちらかといえば良からぬこととか  
どうしようもないことがほとんどで  
埋め尽くされそうなのがあたりまえ。

浅蜷の酒蒸しの汁でスパゲッティを

白身魚の昆布めの昆布で湯豆腐など  
以外と当たり外れのないおいしさも。  
(10.11.26)

## 持つてる人

ひとときわ冬装束を整えた山脈が輝き渡り  
今冬は間違はなく降ると聞いたばかりの  
噂話が晴れ上がった空に消え行くようだ。

散らかった小物机みたいになってきた  
iPadのOSをバージョンアップしたら  
フォルダ整理ができ除雪したみたいに。

ICTが職場を良くするなんてお門違い  
書類で山積みのデスクトップに顔を  
突っ込んでいる事務屋は山男のよう。

キーボード作業などを続けたりしても  
肩が凝ったりしなかった椅子がこのごろ  
身体にしっくりこないのはなぜだろう。

歯が抜けたような前列の席へあたふた  
終演間際にようやく間に合った年配の  
夫婦に歩み寄った綾戸智恵のものごし。

開演時間を間違えた二人に十八番の



「テネシーワルツ」を再び歌い上げ  
アンコールはL・コーエンの「ハレルヤ」。  
(10.11.30)

## 誤変換

自転車が出しにくくなってしまいが  
早々とやってきた業者の雪吊り作業に  
背中を押されたみたい背戸の雪囲い。

日頃の運動量の低下は仕方がないが  
午後に子どもらと夕食後は大人らと  
バドミントンをやったら疲れが残る。

昼はスキー場へ夜は体育館へなんて  
とてもじゃないけどやってられない  
気づけば自転車も乗らずに歩いている。

壁に向かい足立てかけ倒立を試み  
誤変換してみたみたいにもろく崩れて  
以前のように出来なくなったヨメ。

使い込んで誤字を吐き出すような  
パソコンだったら辞書学習機能を  
リセットすれば修復可能なことも。

身体の使い方など誤って覚えがち

身につけてしまった癖を脱ぎ捨て  
無駄の少ない運動を愉しくしたい。  
(10.12.07)

## 手の助走

あいにく都合が悪くて行けなかったが先週土曜にリーグ戦の大会に出場したバド部員の一人がなんだか老女の動き。

日頃の走り込みや練習量の足りなさを指摘したらゲーム中にシャトルをどう返すか勉強以上に考えて疲れたなんて。

明治生まれの祖父と大正生まれの母がほとんど生活環境を同じくしていてもまっとうした寿命に十年あまり違いが。

歩けるうちが華のようで身動きひとつままならなくなるにつれて判断したり考えることがどうにもならなくなつて。

愉しんでいた一人旅に出かけなくって近所を出歩いたり散歩することもなく部屋に引きこもってしまった晩年の母。

柿の木から落ちて一年以上寝込んだが

動けるようになったら歩き働き過ぎて  
へばったりしながらも祖父は惚けずに。  
(10.12.14)

## 遺品

すつかり葉を落とした枝振りを  
際立たせるように曇まじりの雨が  
忙しく走らせる冬の下塗り刷毛に。

残り僅かなお袋の遺品のひとつを  
ヨメが着込んで家事をしていたり  
暖房器やラジオは居間で使い回し。

叔父さんも亡くなった実家から  
送られてきた野菜そのほかなど  
これまでとはちよつと味が違う。

いったんもつれたらほどけない  
ヨメと姑の仲はなりゆきまかせ  
とにかく双方が孤立しないこと。

三世代に渡って家を営み続けて  
労苦の果ての長寿が思いがけず  
祖父と母に和解をもたらしたか。

小川糸『つるかめ助産院』から  
受胎から誕生にまつわる介助の  
響きが介護にまで届けられよう。  
(10.12.24)

## 食の渡し

朝方から降り出した雪の勢いに  
合わせたみたいにやり残していた  
煤払いを済ませ火燧を出してみたり。

越してきてすぐ家族が五人になり  
四十年近く高屋敷に棲みついて  
はじめて二人きりの年暮れを迎え。

秋口あたりからふだんの食事など  
P Cで聴き慣れた音楽をU S B対応の  
装置で聴き直したみたいな味わいに。

ここ十年あまり家族がまさかの病や  
老いの難事に向き合い続けたりして  
飯が喉を通らなくなるような事態も。

ヨメの手料理を酒と一緒に流し込む  
なんてことではか持ちこたえられず  
心ゆくまま味わう食生活にほど遠く。



路面の夕食など掃除がしつかりした  
眺めのお店選びが間違いなからうが  
料理人の家族安定までは見定め難い。  
(10.12.31)

遺品

十字路で立ち話抄二〇〇九年一月～二〇一〇年十二月

発行 二〇一五年四月十二日

著者 吉田恵吉

編集・発行 〒939-8036 富山市

高屋敷731-6 吉田恵吉